時 報

No.3

1952.2

大阪大學山岳會

目　　次

第三号

一、偶　　感　　篠田軍治
一、我等の歩み－回顧と展望
一、一九五〇年　夏山より
　　南股概説
一、一九五〇年　冬山より
　　ベニヤ板に就いて
一、一九五一年　春山
　　後立山逆縦走
一、一九五一年　夏山
　　（一）鹿島槍カクネ里
　　（二）登攀　記録
一、一九五一年　秋山及び冬山
　　北岳バットレス、頂上設営、鳳凰山
一、山行記録（一九五〇·六月－一九五一·八月）
一、集会記録（一九五一·四月－一九五一·九月）

偶　　感

篠田軍治

七月の始め学生と一緒に道場へキャンプに行った。夏山を前に控えて百丈岩でトレーニングをするのが目的である。土曜日の午後から出掛けたが、出発前から案じられた天気は夜半から崩れ、翌、日曜日は相当な降りになってしまった。屋根型の八人用と四人用を一張りづつ張ったが、どちらも相当に雨漏りがする。勿論戦前のもので何遍も修理して、防水も不完全だから雨漏りは当然である。フト「この天幕はあまり漏らないな！」という声が耳に入った。自分は耳を疑った。自分が相当な雨漏りと思っていたところへ、つまりこの天幕でもっとひどい雨、それに風が加わったら相当なものだと思っていたところへ、こんな言葉が耳に入ったのでいささか驚いたが考えてみればこれは当然のことである。自分の現役時代というと、既設の山岳部へ入部したのは高等学校の時だけ、それも二月に出来て九月に入った。だから現役時代に古い天幕を持って行った経験がなかった。阪大山岳部に関係してからも戦前は毎年天幕を新調したり、修理したりしていたから相当な暴風雨に会ったことはあっても、ひどい雨漏りで困った経験が少い。だから戦後の補修の不完全な天幕の経験しか持たない現役と雨漏りに対するセンスが全く違っていたのだ。こんなことに今頃になって気がつく自分の迂滑さも相当なものだが、雨が降ったら天幕は漏るものと思い込んでしまうのも考えものだ。夏山の報告などを聞くと大した雨でもなさそうなのに防寒具を濡らした話を聞くことが多いので、どうしたことかと思っていたが、どうやら雨が降ったら物を濡らすのは仕方がない、そこまで行かなくても濡れることを気にしないことにも原因があるようだ。も少し工夫したらそれ程濡らさなくても済むものを全部濡らしてしまうということがないであろうか。

雨の問題に限らずこんなものだと頭から思いこんでしまうのは危険である。足は靴の中でがたがたするもの、靴は締具から直ぐ外れるものと思っていてはスキーは上達しない。山党が前傾バンドをして山へ登って行くゲレンデスキーヤーを笑う前に、山党にも反省する点は多々あろう。

これと同じようにきまった方面の山ばかりをやっていると、山登りというものはこんなものだと狭い、誤った観念を持ってしまい勝ちである。今年の夏山のカクネ合宿では山に呑まれてしまった点がありはしなかったか。これは従来、対象にしていた山と性質の違ったところに行くと勝手が違うことから来る心の動揺

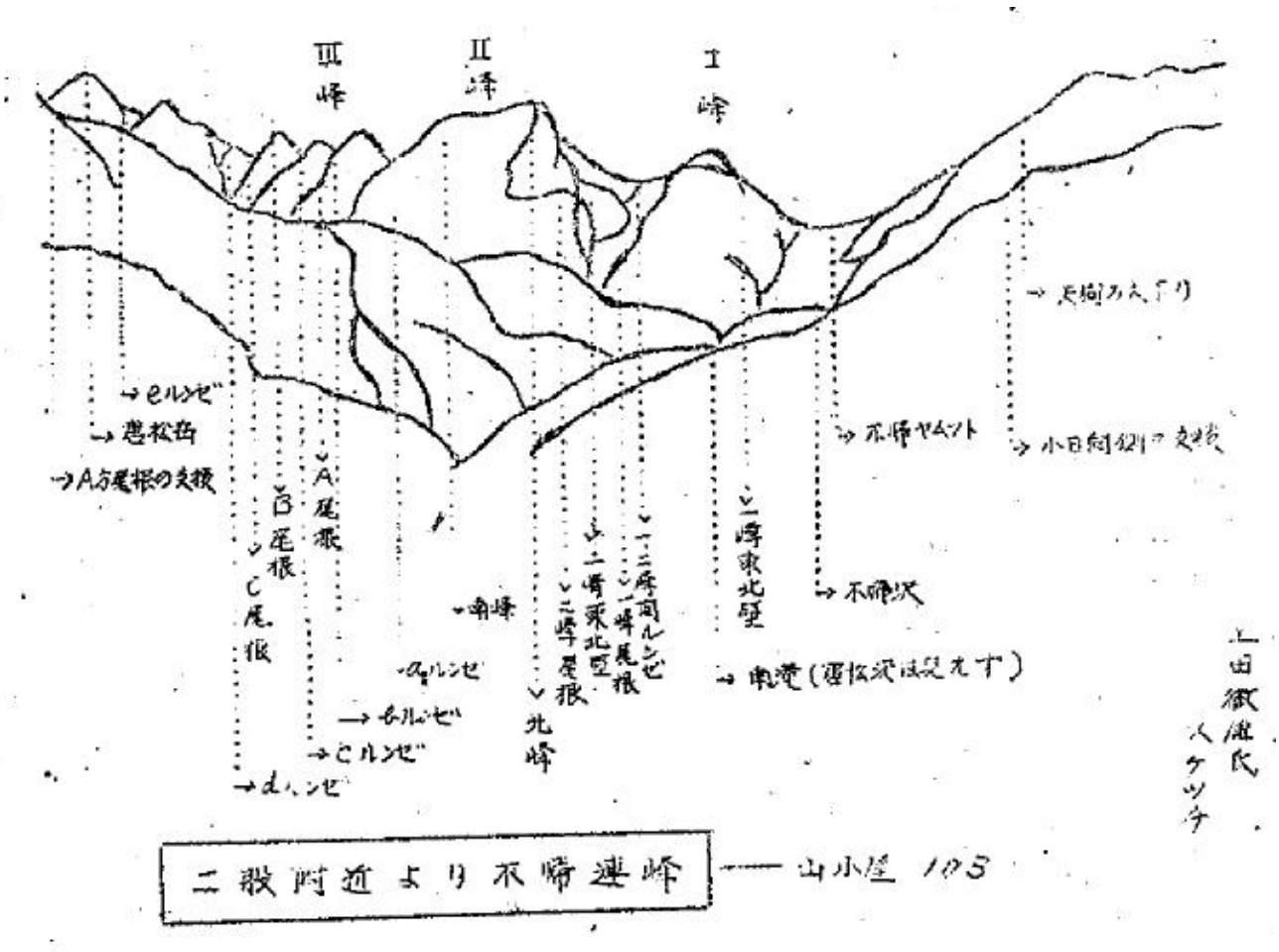
が原因であろうが、その又原因というのが山はこんなものだと思い込んでいたのがぶちこわされるためである。だから現役時代に南アルプスのような北アルプス北部と全く性質の違ったスケールの大きな山、しかもそこへ冬入っておくのも悪くないと思って今年の合宿を北岳に持って行くことに賛成した次第だ。毎年行っていた冬の後立山にも勿論未解決な興味ある課題は多々ある。然るに今年の対象を南アルプスに求めたのは、厳冬の後立山だけへ行っていると、人によっては何年行っても本格的なアイゼン・ピッケルの世界を味うことが出来ない恐れがあるし、きまりきった天候の下での行動に馴れ過ぎると当然注意すべき点がつい忘れられ勝ちになる怖れがあるので、これを避けるためでもある。例えば凍傷の注意でもそうである。風の強い寒い日や、猛吹雪（風雪と違う）の中で行動することが少ないだけに顔面その他の凍傷に対する注意が不足になり勝ちである。寒さについても同じことが言える。北と南では寒さの性質が違う。だから北で鍛えただけでは達せられる点には限界があるように思われる。八ヶ岳や南アルプスでは本格的な雪崩の経験を積む機会は確かに少いであろう。併しそれだけに、その補いとして北では得ることが困難な違った種類の体験が得られ易い筈である。

一九五〇年七月（南股合宿）

南　股　概　説

大　島　輝　夫

（昨夏私達の入った南股は戦後殆ど忘れられた存在となっているので、私の知っている戦前の記録を中心として概説を書き諸君の今后の御参考とし度いと思う。）南股の登山史は昭和五年秋白馬館の手により南股にスキー小屋が建てられた時に始まる。その後甲南山岳部が毎春此のスキー小屋を根據としてたゆまず合宿を続け輝かしい開拓の仕事をなしとげた。昭和九年スキー小屋がつぶれる迄の江南の記録は故田口一郎氏により「山岳」（文献①）にまとめられている。地理的に南股と言えば白馬山麓二股に於いて合流する杓子、鑓、不歸、唐松方面よりの沢を指すのであるが通常南股よりする登山は天狗の大下りより不歸、唐松東面、八方尾根方面に限られている。之は余程の大雪の年で無いと六左エ門の滝が春も埋まらず沢通しは通れないので南股を根據として杓子・鑓方面にはるばると小日向山を越えて行くよりは、むしろ猿倉小屋を根據地として杓子双子尾根のコル（双子岩附近）にテントを張り杓子・鑓の東面を登った方が良いからである。甲



二股附近より不歸連峰 —— 山小屋 105

南・関学の杓子の東壁、ヤリの北山稜の輝ける登攀（文献 51、52、53）や一九五一年春の京大 54 のヤリ南及び北山稜の登攀も全て後者の方法を採用している。

無雪期に杓子、ヤリ東面を登るのなら南股よりもう少しキャンプを進めて杓子沢の出合かヤリ温泉を根據地とした方が良い。例えば十一月のヤリ北山稜（関大西島氏 55）八月の南山稜（浪高 56,57,58）の初登攀はどちらもそうしている。

以上の如く南股奥の登攀史は南股を根據とする限り不歸方面が主要な目標となる。甲南に続いてその流れをくむ東大が此の方面に入り、又大高及びその流れをくむ阪大等が南股を Base として登攀を試みている。前記田口氏の文章と共に（①）にのっている「不歸の第二尾根」の写眞を第一尾根より撮影された小山義一氏は東大山岳部の方なので東大山岳部も甲南出身の田口、伊藤兄弟等と共に此の方面を相当登っていると推定出来るが残念ながら記録を見ていない。

所で積雪期の南股と言っても成功した主要な登攀は全て春に限定されている。之は例の劍と後立山の冬季における悪天によることは勿論であるが、それに加えて南股出合を Base とする時は両岸のきりたった谷底を取附点迄雪崩とラッセルに悩みながら長い間歩かねばならないという特殊事情も加はるのである。田口一郎氏は昭和六年正月の記事として（①四八一頁）

「窓ごしに見る不歸の岩峯は心をそゝる。だが途中の深い雨俺の谷は雪崩が溜る溝の様なもので春のクラストの時期でなければ通る気も起らない。鑓岳や杓子岳も六左衛門の滝が此の雪量では通れそうもない以上問題にならず、今の処は正面の八方尾根から唐松岳に登るのが一番良さそうである」と書いていられる。若し冬の不歸東面をねらうとすれば野口栄一氏等の大阪薬専が試みた如く八方尾根にテントを進め、ここを B.C とする方が勝っていると思われる。まことに千九百三十九年正月は此の方面の冬季登山史に於ける一つのクライマックスであった。即ち八方尾根には前記の如く不歸二峰東面をねらう大薬、同志社の合同パーティが居り、南股には大高と神戸商大がやはり不歸を目標として居り、双子岩附近には関学が杓子・鑓をねらってテントを張った。（②、52 エーデルワイス 44 頁 62 頁）然し何れも悪天の為成功しなかった様である。

春期に於ける不歸東面の最も輝ける登攀は甲南田口一郎、伊藤新一両氏の第二尾根（千九百三十三年③）阪大中條徹、島雄昭美両氏の２峯の壁直登（④⑤）甲南小川氏等の第一尾根（⑥）（千九百四十一年四月一日）であろう。後の二つは戦時中の爲どちらも記録が私的なもの以外発表されていないのは甚だ残念であ

る。中條（理）島雄（医）両先輩の記録は千九百四十年四月一日南股を根據地として不歸第二峯を甲南と反対に三峯側よりとりつき直登したものであるが、その年の夏中條氏は大高と共にやはり此の南股の烏帽子尾根を登攀后遭難死され、島雄氏又戦死されたので、一端を中條氏の追悼録中にうかがうのみで直接に詳細をお聞き出来無いのは残念である。八方尾根より二峯の壁を見る度に一体どこをどう登ったのかしらと思うのである。

以上の他に甲南は牛首岳の直登を行って居るが（⑦）この Party には現在理学部におられる関集三・山口省太郎両先生が参加されている。

次に夏の南股であるが私の知っている限りでは日本登高会と大高が入っている。日本登高会の上田徹雄氏の書かれた「山小屋」103 号⑧の夏の不歸東面の紹介は良くまとまっているし、私達も名称は全て同氏に従うことにした。大高も数回入って居り⑤によれば中條氏は第二峯壁直登・第三峯 A 沢（上田氏の b ルンゼ？）烏帽子尾根を登っているが、二峯の壁も夏は大して悪くはない様である。

▽　根　　據　　地

夏の Base として大高は我々の如く取入口附近にテントをはり、日本登高会は谷通し登り南滝の上にテントをはっているが我々の経験では之は不適当と思う。年により大変異なるらしいが大高の記録によっても従来楽に登れた谷筋が昭和十五年夏にはすっかりあれて非常に悪くなったとある。私達の入った千九百五十年夏も非常に悪く南滝迄の十回位の徒渉は水も大変冷たく登攀前の闘志をにぶらせた。また南滝をまく時記録の示す如く落石の危險が大であり、その上やっと岩場にとりつくのである。アプローチは大変長く取入口付近の高度は丁度千米で唐松は二千七百であるから高度差千七百米、水平距離は約五 km である。穂高でいえば横尾岩小屋を根據地として北穂高、滝谷の岩場を対称に往復するのと全く事情が同様である。それより悪いのは歸路八方尾根から直接テント迄下る適当な道が無い。我々の昨夏の記録が雪溪、ルンゼの登高にすぎないのに、途中でビバークしているのも理解して貰えよう。今後夏の不歸東面を目標とする時には八方尾根より入り、水、薪に不便ではあるが八方池附近に B.C をはり、適当な下降路をみつけて不歸沢と唐松沢の出合附近を A.C とすると良いと思う。この出合には二・三人用の岩小屋があり、狩人が使用するらしく茶碗がころがっていた。（然し細野の中村実氏は此の岩小屋の存在を知らぬらしかった。）此處を A.C とする

と高度差千四百、水平距離二 km となり、涸沢より滝谷を往復するよりやゝ大となる。未開拓の黒部側を目標とするには唐松小屋附近が根據地として良いだろう。

積雪期の根據地として南股取入口附近は人里に近く八方尾根の如く猛風雪により連絡が途絶する心配も無く容易という利点はあるが今后はやはり八方尾根にテント又は雪洞をつくり根據とする方が多くなると思う。

最后に夏の南股は落石の危險が大であるから充分注意して欲しい。我々が不歸沢を登っている時も霧の間より子牛位の岩がグリセード？して滑り落ちて来たのには全く驚いた次第である。

尚原稿をかく迄に東大・大高の記録及び甲南の戦時中の記録の調査が充分完全には行い得なかった。

引　用　文　献

① 「山岳」31 年 2 号 m,p

② A.A.V.K.　時報 11 号（1939 年 2 月）

③ A.A.V.K.　報告 4 号 p

④ A.A.V.K.　時報 14 号（1940 年 6 月）

⑤ 眞徹（中條氏追悼録） m

⑥ 甲南報国団誌 1 号による

⑦ A.A.V.K.　報告 3 号 m

⑧ 山小屋 103 号（1940 年 8 月） m

⑨ 岳人 46 号

A.A.V.K.は関西学生山岳連盟の略称

杓子 face 及び鑓岳南北山稜の文献

51 A.A.V.K.　報告 8 号 p

52 EDELWEISS10 号（関学報告）

53 A.A.V.K.　報告 14 号（1940 年 6 月）

54 東大山岳部時報 1 号（1951 年）

岳人 47 号

55 A.A.V.K.　報告 4 号 m

56 ケルン 4 号 m,p

57　　ケルン 6 号

58　　A.A.V.K.　報 告

　　6 号　　此の方面のその頃迄の続報

59　　山岳　35 年 2 号

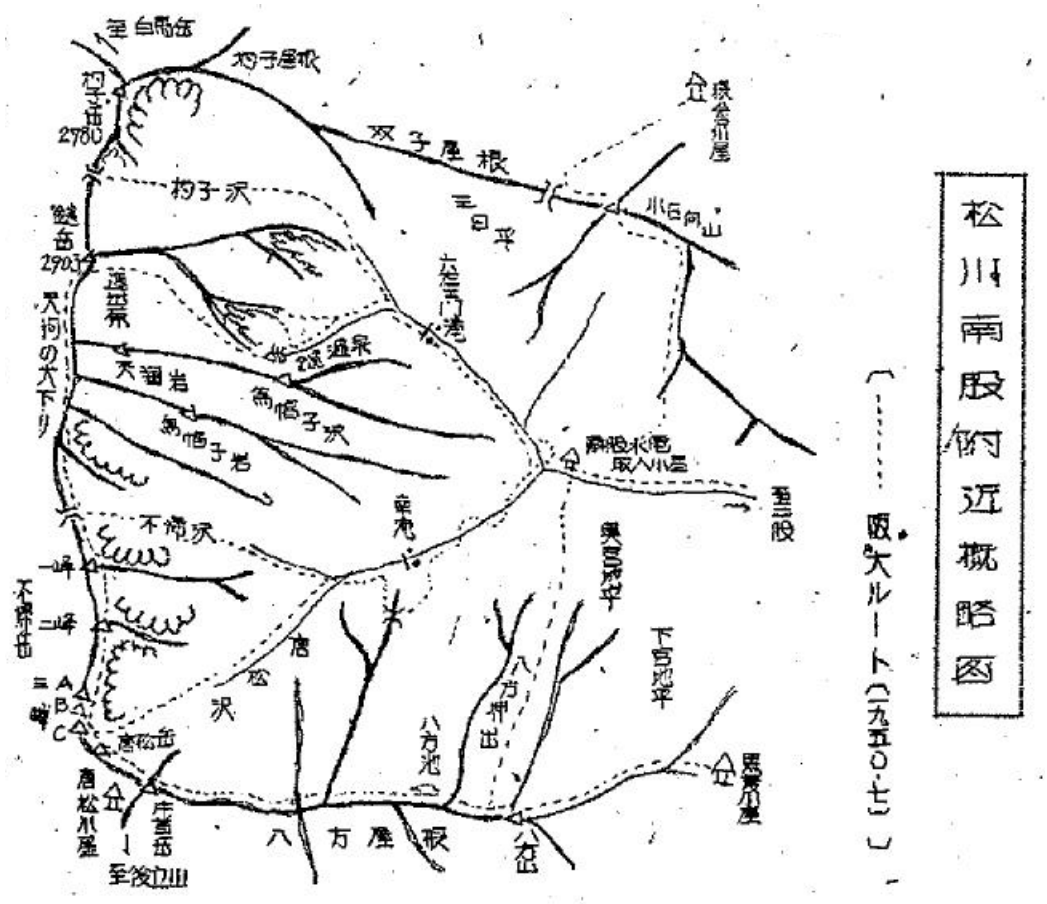
地図

概念図のあるものは文献目録中 m とかいた

写眞

文献目録中に p とかいたものは写眞がある、その他参考となる写眞はいくつもあるが

101 **ケルン**　1 **号**　　102 **ケルン**　14 **号**　　103 **「山」**　24 **年** 8 **月号**　　104 **「高山深谷」**J.A.C **編**　10 **号** P35



一九五〇年十二月（冬季杓子尾根合宿）

――ベニヤ板マットについて――

大　島　輝　夫

関西学生山岳連盟の時報第八号（昭和十年）によると、加藤文太郎氏がベニヤ板を丸く捲いて持参しマットとして使用している。マットの少ない我々も杓子尾根の合宿に使用してみた。

ベニヤ板は川島の家にあった三枚ベニヤのやゝ厚目（3mm 位）のものを五十糎平方位に切り二枚を一人分とし、一方の両隅に穴を明け二枚を紐で結んだ。ベニヤ板は濡れるとはがれ易くなるので、防水だけは完全にしたいと思い美津濃技術研究部の新保先輩に御相談して塩化ヴニールで殆ど完全に防水して頂いた。但し電気炉で乾燥する時こげ易いので注意を要する由である。又特に側面の防水を良くする必要がある。比較の爲にペンキを厚くぬったもの及び美津濃製スキーラッカーを塗ったものも作ったが之等は使用する機会が無かった。塩化ヴニール防水のものも始めは人数の点で必要がなく後からテントに上げたので、僅か三日間使ったにすぎず十分研究したわけではないが、今后の爲に結果をかいておく。

マットの條件として稲門の関根吉郎氏は次の四つをあげている。（山岳研究講座Ⅱ・明文堂）

１．防水性、下からのしめりを防ぐこと

２．断熱性あること

３．軽く運搬に便で耐久力あること

４．上に物を置いても安定せしめうること

さてベニヤマットは前記の如く防水したので第一の條件は良く充した。カポックの如く徐々に湿ってくることも無く、テントに歸って来た時入口や張出の所において雪が落ちると直ぐ外へ出して拂うとすぐ落ちて便利だった。

２の断熱性は我々の使用中は不便は感じなかったがヘヤーロックやコルクと比較すると劣ると考えるのが常識であろう。

３．重量は一人分が 1kg 弱でカポックと略等しい。湿って増量する事がない点は良い。何より便利なのは容量小で数人分をまとめてルックの上にしばって運搬出来る事である。耐久性は側面の防水を注意すると十分であると思うが、ベニヤ板の安価な点から耐久性はそれ程考える必要は無い。

４．安定性は他の何ものにも勝る。実際カポック等は数日も滞在すると眞中がへこんでラヂウスが不安定になったり寝にくくなったりするがその心配がない。

５．費用は一人分百円弱で出来るのが有難い。又すぐ手製出来る点も便利である。

結論、安定性運搬の容易な事、防湿性、費用は他のマットに勝るが、断熱性はどの程度のものか長期間使用して研究する必要がある。ベニヤの接合剤も最近の高分子合成品を使用してあれば水に対し側面を大して心配する必要は無くなる。マットとして使用しなくても大きな計画の時はラヂウスの下敷及び出入口に敷くと便利であろう。

尚最近岳人 36 により福岡山の会が板マットを使用している事を知った。板の材が何か書いて無いが 8×50×1 糎の板のピースを防水塗料仕上で紐で連結して適当な長さにして用いられている由である。ベニヤ板ではピースにしない方が良いと思う。何故かと言うと一枚板でも運搬には困らぬし、ピースにすると側面が多くなり弱点が増加する上に前記の安定性等の長所がなくなるからである。福岡山の会は撤收の際のファイアーにたいてしまうとある。

また法政は今春劍 C3 でグランドシーツ代用にベニヤ板を使用し防湿になる程度であったと「山」6 月号に記してある。マットはヘヤーロックを使用した様である。

最后にお世話になった美津濃の新保先輩に厚くお礼申し上げます。

一九五一年三月

――后立逆縦走計画の失敗――

終戦后、私達が部の充実と高揚の全てを賭けて目指して来た目標は積雪期に於ける后立山の縦走であった。后立東面を主とする冬の合宿や一九四八年春の八方－鹿島槍の往復の后に漸くこの計画は具体化された。

私達が計画した后立逆縦走の原案は次の通りである。

〔A〕L 加藤、川島、坪井、大久保（OB）

〔B〕CL 徳永、松久、細見

（三月二〇以后細見 A 隊に編入）

〔C〕L 大島、尾藤

以上の三編成の下に、A は大沢より針の木－冷小舎へ雪洞前進、B は鹿島より、小舎荷上げ、C は八方より唐松小舎に入り、A・B より選抜の二～三名の縦走隊を迎える。縦走隊は晴天を待って唐松より一気に猿倉へ、という骨子であった。

本計画は三月十七日より実施されたが（詳細記録）サポートの配置も終えた三月二十二日に A 隊の坪井がスリップし負傷した爲に中止された。計画を中止した事は正しかったけれども、スリップを機として幾多の誤りが計画自体の上に反省されなければならなくなったのである。例えば訓練のために行うという見地からすれば縦走計画はサポートの長期の待機、補充食糧等の点に於て必要以上の出費と日数を伴うように考えられた。又一面から云えばこの事故の后の行動は我々の意を強くするに足るものであった。本春山について記すべき事も多いが、ここにはその反省と事故当日の隊員の手記とを記し、詳細は巻末の記録に述した。

（徳 永 記）

春季後立山縦走計画失敗に対する反省

後立逆縦走を試みた我々は針木でつまづいて飽気なくも計画を断念せざるを得なかったがこのアクシデントの原因を振り返る必要があると思はれるので一言茲にのべてみたい。

直接の原因は重荷を負うた体で黒部側の急斜面をステップカットせずに斜に降りつつあった T にあるがこれは全くリーダーたる私の責任である。T の落下地

点に至る迄の我々の行動を考えてみると肉体的疲労は相当大きい様である。即ち明かに無理をしすぎている様であった。

大阪－松本－大町間夜行列車にゆられ大町で五、六時間居ただけであり、この間も出発準備に忙しく更に午後四時頃大出から大沢迄強行したのであった。種々の事態からゆるされないかも知れないが大きな山行をやる前は少なくとも一日山を前にして休むくらいの予猶は今後必ずとる事にしたい。大沢小舎の不備な生活はこれに拍車をかけ翌日は一日雪で休養しているが過労が回復していなかったのであろう。又我々の期待していた針木小舎が完全に雪がつまって使用できず落着けなかったのも一つの因子であろう。然し小舎から針木岳頂上迄の稜線が最も体に大きい疲労を与えた事は間違いないし頂上の烈風が丁度晝飯時の我々に食欲を起させなかった事は後から考えると憎むべき天の仕業と言える。私は針木－スバリ間の最低鞍部で信州側に風を避けて昼食をとるつもりで先を急いで降りていった。現場は黒部側を少し捲き気味に下る所であった様だ。足首に自信のある私はすたすたと降りて行ったが他の隊員に注意を与えんとした突嗟の間にＴは落ちたのである。私の行動を見て油断したＴの一投足が不慮の結果を起した事は全く私の罪と云えるのであって、隊員各自のコンデイション及びテクニックを絶えず念頭に置いて行動する事が如何にリーダーとして重要な事か痛感させられる。我々の持参した装備についても考えるべきは幾らでもある。一本のザイルも持たなかった事は何としてもいけない。

アクシデント後の隊員の行動は良くやって呉れたと思っている。特に大久保先輩の適切な治療は全幅の信頼を置かせるものであったし連絡に活躍した細見、大久保氏を助けた川島の奮闘は目ざましいものがあった。医学者の参加がかくも有難い事とは不覚にも始めて知った次第である。

要するに今回の失敗は計画そのものに大きな欠陥があった様である。例えば大沢迄はサポートさせなければならなかった如きである。然し多くのアクシデントは起るべくして起るのであるという事及び我々の行動の中には平素は見逃されてはいるが一度事故が起これば**それ**と指摘される様な多くの危険性を含んでいる事は深く胸に刻みこまねばならない。

（加　藤　記）

事　故　当　日　（手記より）

三月二二日（晴午後雪）二･〇〇起床、四･〇〇出発雪面はクラストしていて殆どもぐらなかった。ランタンに照らされた5人の影がゆれて居た。吾々がこの谷を登るについて最も注意をしたのは雪崩であったけれども何日も続いた晴天の後なので出るべきものは出盡したのか吾々の大沢滞在中その音一つ聞かなかった。今歩いてみても全くその憂はなく、古いデブリを乗越えるのに少しばかり苦労しただけであった。新しいのがスバリから出て居たが問題にならず谷の中央迄も達して居なかった。その中夜が明け始め、マヤクボのあたりで全く朝になった。振返って見る後立の峰々は朝日に輝き、白と赤と青とそして黒々とした岩の織成す色感はいかにもすがすがしい。此処から針ノ木峠までは40度以上の斜面が数百米続いて居る。左岸よりに、真一文字に登って行った。雪庇を嫌ってその右側に出ようとそのまま左岸をたどり、黒部から送られる吹き溜りをラッセルし、八･〇〇稜線へ出た。とたんに猛烈な風と雪煙に出迎えられ小屋に逃げ込もうとしたが小屋は天井迄も雪がつまって中に入る事は雪洞を掘る様なものなので天気の良いの辛い風の中でみぢめな朝食を攝る。

九･〇〇何か物足りない様な気持ちで出発、すぐ稜線に取附いた、東向の尾根は太陽の直射を浴び雪がゆるんでかなりのラッセルをしなければならない。思ったより急峻なリッヂを交代でラッセル。くさった雪と露出した岩との混った悪場では30分以上の時間をかけて数メートル行くか行かぬかであった頂上より一つ手前のピークの肩迄来てベルグシュルンドに阻まれて取付の岩が越せず遂に信州側をトラバースする事にした。予想と反対に雪の状態はよく足首迄しかもぐらず全装備を荷って居る吾々は恐い岩場を行くよりはずっと気が楽であった。楽々と頂上手前のコル迄いけた。

コルからは雪の壁が二段に続いて居るが蹴込みとピッケルで切ったハンドホールドで難なく乗越えた。そして一二･〇〇針木岳頂上に着いた。天気は下り坂であったので少し休んですぐ出発した。リッヂを下り、それの切れた所から左へ下り黒部側斜面を十米ばかりトラバースして再び国境線へもどるのである。ここで我々の計画にとって致命的な事故をしてしまった。この斜面は非常に急で、且つがれていてそれが露出している所があり雪は固くクラストしている所とくさった所とが不規則にまじって居た。而も百米程下で本谷と合し黒部川迄落込んで

いる恐ろしい所であった。オーダーは私がトップ次が加藤、大久保、坪井、細見の順であった。中程迄来て私は進めなくなりステップを切り始めた。それで加藤、大久保が私を助けようとして私の下をまわり前へ出た。その時突然坪井がスリップし転倒、滑落して行った、くされ雪に右足をかけ、体重を移した時、足場がくづれたのである。振返った時既に横倒しになり危険な姿勢で数米滑り落ちていた。間もなく横転しながらピッケルと縺れ合いゴロゴロ転がり数十米落ちて露出したガレで停止した。残りの四人は、始めの中こそ「ピッケル！ピッケル！」と呼びかけていたけれどもその中棒の様に突立って唯見守るばかりであった。停止した彼が少しばかり体を動かすのを見た時は縮まった壽命が再び元に歸った様な気がした。

もう一米後か前でスリップして居たら巨岩に体をぶつかるか或は黒部迄落ちて行くところだった。直ぐ加藤、大久保、細見が下りて行った。私は荷物の番をして居たがこの頃より天気は崩れ、風が吹きつのり雪さえまじえて寒くてしかたなかった。負傷者は直ちにスバリとのコルに運ばれ岩の間でツエルトとシュラーフに守られた。我々は信州側へ五米程降りた所に雪洞を掘った。作業半ばにして坪井がしきりに寒さを訴えるので雪洞に移してそのかたわらで作業は続けられた。全員が腰を落ちつけたのは 16 時をまわって居た。細見と私は炊事をし、大久保、加藤は手当にあたった。傷は右股付根をピッケルでえぐったもので出血は相当あったが動脈は外れていた。他顔面や頭部に擦傷や裂傷が所々あったが大した事なく精神的ショックが弱って居る最大原因らしかった。手当一切は大久保先輩にやって戴いたが当然の事とは云え有難かった。手当がすむと楽になったらしく物も食べ元気になったので不格好な雪穴の中ではあったが急に皆ほがらかになった。20 時折り重なって就寝。

三月二十三日（雪後晴）昨夜雪が降りつづいたらしく薄かった雪洞の壁や入口が分厚くピッケルを突込んでも外迄とどかない。シャベルで掘って息抜きを作り空模様をうかがうとどうやら雪は止んだらしい、下山の腹を決め用意したがぐずぐずしている中に時が経ち外に出たのは 16 時であった、最大傾斜線に沿って眞直ぐに下りて行った。湿潤新雪で膝迄もぐるラッセルだが下りの事とて何でもない。細見と私がルートを開き細引きでつなぎ合さった加藤、坪井、大久保が続く、雪崩の恐れは充分あるのに後の三人は情けなくなる程進まない。18 時に私達二人は大沢小屋にもどり、細見は炊事を始め私は直ぐ迎えに行った。19 時に無事

小屋に全員着いた。相談の末、加藤、細見に連絡に下ってもらう事にし食事と休息の後（二四･一五）二人は月明の中を里へと下って行った。二人を送り出してから坪井の手当てをし右股後にもう一つ傷のあるのを発見した。

（川　島　記）

夏の鹿島槍カクネ里

家　田　千　尋

一九三〇年頃から幾多の先蹤者により、無雪期さらには積雪期に開拓せられた鹿島槍北壁は、戦前関東・関西各学校山岳部の集中を受けて居たにも拘らず、主稜の厳冬期登攀が解決するや戦后は更に訪れるものなく、関学、法政、浪高等により僅かにトレースされたにすぎず北アルプスの雑踏に比し静寂そのものを誇っている。之等先輩の域に到達せんと努力する我々が、その昔彼等の情熱を傾倒した北壁を再検討する事も無駄ではなかろう。種々の記録及び我々の一九四三、一九五一年度の合宿の記録により先蹤者のトレールを辿ろう。

地　　勢

カクネ里は鹿島北槍を起点とし后立稜線と天狗尾根により囲まれ北東に向う略菱形の U 字谷である。大川沢は北槍から東に派成する天狗尾根が遠見尾根に迫って極端に狭められた後、白岳沢とカクネ里に二分する分岐点に夫々滝が有り、関門の如くその入口に控えている。白岳沢が細い雪渓で主に左（以后右左はすべて下から之を見上げて云う）から大きな支沢を受け折れ曲りながら続いているのに比し、カクネ里は北壁全体に等分に懐（フトコロ）深く喰い入り、出合からバットレスと雪渓は一望の中にある。入口の狭さにくらべ奥はガスのヴェールに、北壁は見えがくれに漂流地的な幾分のびやかな気分をかもし、昔平家の残黨がかくれ住んだと云う伝説も又宜なるかなと思はせる。出合より見るバットレスは上下二段に分れ、上部はブッシュ帯の緑色に下部は黝んだ岩壁が雪渓に続いている。北槍を中心とし、大小のガリーがリッヂをはさんで左右斜めに下り、やがて雪渓に向って雪渓上端を抱き込むが如きカーブをなして落ちている。左肩には見上げるばかりの天狗尾根が頭上に迫って来ている。出合からカクネ里中核部迄は、左の天狗尾根は約十本の沢がすべて浅く残雪をごく僅かに上部につけ、急傾斜でカクネに落ちている。后立国境線側はキレット沢に至る迄、口の沢、中の沢の日本の大きな沢を入れ、その間の尾根も相当大きい。口の沢はカクネ本谷に負けない位の長さを有し、最上部のガレ場は特徴的だ。后立稜線側は、下部は猛烈なブッシュで、上部は岩質もろく、従ってカクネ里は雪渓の左側は平坦な所は少く、右側は緩傾斜で幅は広いがブッシュの爲快適なキャムプサイトが極く限られている。

通　　路

　従来三が計えられている、即ち

一、大川沢遡行

　一九〇八年七月三枝氏が此処を下られた（冠氏后立山連峰）相であるが、一九一八年浅井氏が初めて遡行して白岳に出られた（山岳十五年一号）。その后一九三〇年頃から立教、神戸商大、R･C･C、京大、東京商大、甲南等が入られたが、京大は天狗尾根側え甚だしく高廻りを余儀なくされ、之はトレースするルートとは見なされない。此処に東京商大小谷部氏の記録をあげて置くルート図も同氏のものである。然し殆どが白岳沢を下降している様であるが、八月中旬迄大した困難もないから、どうせ二日費やすなら此処を選んだ方が楽ではないかと思う。殊に六月中旬迄なら雪溪が二俣下流の險悪な河床を蔽い、更に下流もスノーブリッヂが処々にあるので一層容易である。尤も豪雨等による増水時には絶体困難だからどうしても他ルートに依らねばならぬ。鹿島造林小舎から大川沢左岸の林道はやがて消え沢伝いの遡行が始まる。大体始めの内は一寸悪い所でも高廻りしないで渡渉する方が楽で早い。右左に渡り返して進む内に沢は西方に弯曲し傾斜も急になる。やがて両岸は險しい岩壁になり廊下状を呈して来て滝や深洲の爲どうしても高廻りを余儀なくさせられる。だが辛いのは前后二・三回で大地獄子地獄の名所がある相だがよく分らない。二俣近くに来ると左岸が非常に悪く左岸が一帯におとなしい草付で河床から二・三十米の上を楽に捲ける様になる。更に右岸の草地を少し捲き岩壁にぶつかり一旦河原に降り右岸の木の生えた草付迄登れば楽にカクネに入れるが、河原からこの草付の取付きが悪い。而し河通しに行くのは相当のアルバイトを要し、水を僻けて天狗尾根側を捲けばブッシュに悩まされていたづらに時間を喰う事必然である。而し今夏（一九五一）鹿島部落で聞いた所によると林道は更に大川沢上流迄のばされる相であるから、やがては楽なルートとなろう。なほ我々の二股から唐松窪附近迄の踏査記録があるから本文を参照されたい。

二、白岳沢下降

　最も適当と思はれるルートである。白岳の南の鞍部（恐らく白岳小舎は此処に建つのであろう）からすぐに広い雪溪の上を二股出合に下るもので、傾斜ゆるく長いだけで落石の危險もない。カクネとの出合のすぐ上迄雪溪は続き出合の十米程の滝は左岸を捲けばよい。七月中旬迄は滝も雪に埋まり楽々と下れる。出合か

らカクネに上る滝も右岸を捲いて越せる。カクネは沢通しに左右両岸とも歩けるが左岸は出合より二百米位上流で一ヶ所高廻りを要する。唐松小屋を朝出れば合宿用全装備を持ってカクネ里ベースキャンプ迄ゆっくり一日コースである。
遠見尾根の切り開きが出来れば（今年中に出来る予定であったが）小遠見から正面に北壁カクネ里を一望の中に收め得るし、国境線迄登らずに大遠見の上から白岳沢に下れるので労力も省ける。

三、キレット沢下降

カクネ里の核心え国境尾根から下るこの雪溪は上部で三分する。この中中央のが通路になる。之はキレット小屋よりすぐ北のピークを一つ越した鞍部から下るものでコルからカクネ側に十米も下ればすぐ雪溪だ。七月中旬迄は切れないがそれ以后で切れた場合には大体北側（五竜側）のシュルンドに入ればよい。上部は相当急傾斜であるから荷物が重ければ注意を要する。グリセードで三十分程でカクネの本谷に入れる。このルートはバットレス登攀后ベースキャムプに下るものとして用いられる。下部は落石に埋められているが之は左右の分岐した雪溪を落ちて来るもので、何れからも天候に拘らず落石がある。

根　　據　　地

一、キレット小舎

之をベースにする時は上記のキレット沢を下降してカクネに入る。而し夏季は稜線を縦走する人が多く小舎は狭いからお互いに迷惑にならぬ様開設期間中は遠慮するべきであろう。而し六月頃なればカクネ本谷は雪に埋めつくされるので、雪上にテントを張るより此処を根據にしてキレット沢を一気にグリセードで下るのが好いであろう。天候の悪いカクネ里での合宿で暴風雨の時等絶好の僻難所である。

二、天　　幕

長期滞在には天幕をカクネに張り北壁の懐に抱かれるがよい。出合附近両岸上流の左岸中ノ沢に至る迄適当にキャムプサイトは見付けられる。出合上部は雪溪は切れ、水薪も豊富で口ノ沢上部も左岸から水は流れている。長期に渡って天幕生活をする時は、霧と雨の王国カクネ里に対し充分抵抗力のあるのを持ちうべきでフライの威力も発揮出来よう。此処からみるバットレスは終日我々を倦かしめない。

三、二　俣　岩　小　舎

見ていないから分らないが針葉樹八号に詳細に記録されている。二股出合から二丁程下れば右岸の河底から二十米程の岩壁があり、その上は帯状のなだらかな草地でその上縁は急な崖や樹林になっている。この草付のやゝ上流寄り岩壁にのり出して突起している丸い樹叢の下にある相であるが、此処カクネに行くにはどうしても上縁の急崖を二十米程登らねばならず、川に水を取りに下るにも岩壁を二十米程下らねばならない。而し五六月頃なら全部雪渓続きで二十米の岩壁も雪に埋まり僅か二、三米上れば岩小舎に入れる。

北　　壁

北壁は北槍を頂点とするほぼ三角形のバットレスで、雪渓上端から七、八百米の高度で八九本のガリーが北槍及びその左のピークから左右両側斜下に向い、約二、三〇〇米の当たりから眞下又は幾分両手で懐を抱き込む様にカクネの中心に向かって折れ曲がり、上部に残雪を有するものはここで滝となり雪渓の上端に落ち込んでいる。北壁は之等のガリーによって低いリッヂを形成し、二一〇〇－二三〇〇の間で帯状にバットレス全面に殆ど垂直の壁を作っている。この帯は北壁の特徴をなすもので、所々オーバーハングとなり登攀に際して大きな問題になっている。即ち北壁に如何なるルートを取ろうとも殆どが取付附近のこの帯に悩され過大の時間を取り、之を乗越して更に上に向う際に時間的余裕を無くし、又登り切れば引き返す事は不可能である。バットレス登攀の鍵は総て此のバンドにかかって居る。取付いて下を見ればスラブ様の岩盤と残雪が底知れぬ程深いベルグシュルンドを成し、乗る岩は信頼が置けず、ハーケンを打てば楔を入れた様に岩はえぐれて一、二回バウンドした后は音もなくシュルンドに吸い込まれて行く。而しこのバンドを切りぬけると上は傾斜はゆるくなりブッシュがふえて安全性は増大する。リッヂの籔やガリーのガレ場草付をこなして行けばよい。高距にしてバンドは壁部は三分の一位だが所要時間は半分又はそれ以上多くかかると見てよい。即ち之等の登攀は岩登りとして決して快適ではない。バットレスは極めて稀にしか踏まれて居らず、岩質は不良急峻である。ルートに取り得るものはすべてブッシュを混じ岩稜とは云い得ない。

名　　称

カクネ里全般の名称は殆ど仮称に過ぎず、慣習された二三の共通のものを除けば各報告夫々統一したものはない。我々は此の中適当と思うもの及び我々の仮称に依っている。例えば白岳沢は本当はシラタケと呼ぶらしいが白岳(シラタケ)が存在するので故意に之を僻けている。ルート図に仮称を記載したから以下に述べる個々のルートについては図を参照されたい。

北壁をカクネ里から見て特徴的な扇形残雪（バットレスの左寄り天狗尾根側中腹に扇形又は頂点を下にした三角形）と奥の雪渓（バットレス右寄りに最も深く喰い入る）とにより、両者に囲まれた間を正面バットレス、扇形残雪の左を天狗尾根側、奥の雪渓より右をキレット称する。

正面バットレス

ルートは扇形残雪側即ち左からはじめて順次右に移る。

一、ピークリッジ　Peak ridge

扇形残雪の右肩に著明な三角形の岩壁が二つ並んで見える。天狗尾根のちょっとしたピーク（荒沢の頭）から始まり、二本の P_1P_2 リッヂとなってバットレスの中腹に展開した二つの岩壁は扇形残雪右横に於て再び稜となりカクネの雪渓に至っている。

P_1 リッヂ

一九三〇年夏京大今西氏が初めてカクネ入をされた時登られたルートであるが、天候悪化の爲壁下で引き返されて居る。一九三一年秋京大は再び同地点で引き返し、一九三二年甲南関氏は同地点から左の扇形残雪へトラバースし天狗尾根に出て居られる。一九五一年夏我々も之をトレースし同じく天狗尾根に出たので岩壁より上部は未完成の儘残っている。カクネからの取付は扇形残雪より出ている目立った滝のあるルンゼの眞下から右に取付くかずっと下の末端からである。取付よりわづかに登るとリッヂは岩壁迄視界をさえぎるブッシュ中の登攀に終始し悪場はない。我々は扇形残雪寄りに岩壁に取付き残雪の上にある沢の滝の右

を乗り越して岩壁の左寄りに岩壁上のリッヂに出ようとしオーバーハングに阻まれ退却したがリッヂをそのまま岩壁の右寄りに上ればさして困難ではなさ相である。岩壁の上は下部と同じく天狗尾根ジャンクション附近を除いて籔の連続だ。天狗尾根に簡単に出るには残雪上をトラバースし残雪の左側の草付を登ればよい。（関西学連報告三号、四号及び本報告記録参照）

P_2 リッヂ

一九三一年京大は P_1 の引返しルートとして之を下っている。リッヂは上部で更に右側の蝶型岩壁に向い P_3 稜を派生する。この間は極く僅かに草を付けたスラブで少し水が流れている。P_2 の取付は P_1 と同じく花崗岩に始まりすぐに草付ブッシュになって居る。岩壁は P_1 よりもリッヂとしての感が深く籔の中を直登し得るであろう、之も岩壁から上部の記録は無い。P_3 はスラブに深く入っている雪渓から取付きスラブの右側リッヂの側面を登り蝶型岩壁を右奥に見るリッヂ上に達し P_2 の岩壁を左に見て扇形残雪と P_1P_2 のジャンクションの中間の高さで尾根は P_2 に合す。P_3 は次に述べる蝶型岩壁左尾根の登路となるものである。（関西学連報告三号参照）

二、蝶型岩壁左尾根

蝶型岩壁とはバットレス中央やや左雪渓の上端に一目で夫と分る蝶の羽の様な赤茶けた岩壁で、上部の残雪のある大きなルンゼ（蝶ルンゼ）は岩壁の中央で滝となり中央部には岩洞が認められる。岩壁の左羽根のオーバーハングに下から見えないかすかな滝が別にある。之はピークリッヂと蝶型岩壁左尾根の間にある上部は割に傾斜のゆるく見える残雪のあるルンゼ（天井ルンゼ）から落ちているが、下からは P3 尾根の爲滝の落口は認められルンゼも途中で消失し、或いは P_2 と P_3 の間のスラブを流れるわづかな浅いルンゼに続くかの様な感を抱かせる。蝶型岩壁左尾根は P_3 に続いてカクネに下っている様に思える程上部のバットレス中最も雄大なリッヂは下部に於て貧弱にわづかに蝶型の岩壁の左尾根の一部を形成するに過ぎない。故にこの尾根に取付くには末端たる蝶型岩壁よりなさんとするは不可能で上記の P_3 のカクネ里側側面から取付き、蝶型岩壁を右奥に見るリッヂ上に出、百米足らず尾根通しに行くとバットレスの帯に当るオーバーハ

ングに行き当る。此処でリッヂは蝶型岩壁左羽根の縁となり直登は不可能で更に帯の下部を左え P_2 と派生尾根の間の小ルンゼの方へ七〇米程トラバースし、所々大きな樺を交えた岩と草付から登る。此処がこの尾根の悪場で三十米五ピッチ程でフェースを切り脱け、再び P_3 リッヂ上に出る。すぐ右下に天井ルンゼが北壁中にこんなゆるやかな所があるのかと意外に思わせる位ゆっくりとピーク尾根側から蝶型岩壁上部にかけて斜に流れている。このルンゼを簡単に乗り越えて眞の蝶型岩壁左尾根が始まるわけであるが悪場は最早過ぎ去って居りあとはおおきなリッヂをブッシュを漕ぎ或はガレ場をどんどん登ると天狗尾根とのジャンクションに着く。なほこの尾根は一九三六年一月一日立教に依って完登されている。（立教報告五号八号本報告記録）

三、蝶型岩壁右尾根

岩壁の右に主稜と並んで下部はカクネの雪溪中に突き出ている。登行目標を主稜にとられ隣の目立たぬリッヂなるが故に未だ登攀記録が無い。下部は岩壁の右羽根の縁をなし上部は蝶ルンゼの残雪上端から大きく右にカーブし殆ど消えかけた低い稜となり北槍左のピークに終る。取付きは主稜と並ぶ岬の末端からがよい。蝶型岩壁に向って余り深く入るとクレバースに行手を閉される。蝶型岩壁の右側同高度の部分が帯に当るリッヂ通しに行ってもブッシュは安全に体を支えて呉れるであろうし、右側主稜のとの間のガリーの岩壁（京大が主稜のルートとして登っている）上部から再びリッヂに出てもよい。この岩壁下部は岩硬く中程逆層で脆く傾斜も強い。上部は再びサウンドになる。悪場は帯の乗り越しで稜の上部は左尾根と同じく籔リッヂである。

四、主　稜（京大ルート）

一九三一年秋の京大の完登以来余多の岳人を北壁に誘い込んだ記念すべき此の尾根は北槍のすぐ左のピークから最も長くカクネに張り出している。即ち下端は蝶型岩壁の右に一番深く岬状に突出する。京大以后夏季浪高、甲南等にトレースされ、又一九三六年一月一日早大に依って積雪期登攀が完成された。バットレース中困難なルートの中に計え上げられ長さからしても所要時間は今迄述べた

ルートをはるかに抜くものである。以下京大の報告に依り要旨をあげておこう。「右寄りに主稜に取付き浅いガリーを左に見て四十米ばかり上で左にトラバース左ガリーに入り七十米上に第一のテラスがある。此の上のフェースを左寄りから取付いて右寄りに進む更にフェースを左寄りに第二のテラス此処から眞直に立った尾根の下を左にトラバースガリーを登り切り第三のテラスへ、右へ今の尾根続きのテラスを越して右側のガリーに出る。このガリーの右続きが主稜だ。之に取付き岩場を十米過ぎブッシュに入る之を五十米（最も難場）ナイフエッヂを通りぬけると再びテラスがある。此処からはリッヂ通しに又左のガリー寄りに更には左の小さな尾根からその左のガリーに這松を漕ぐ。あとは草付、岩、這松を登り切ると頂上すぐ左のジャンクションに出る。なほ此の時ジャンクション直下でビバークをなす。」第二登浪高は主稜右のリッヂに取付き右のガリーからリッヂに出左斜面をトラバース再びリッヂに出其の后リッヂ上を最后の岩塊を右へトラバースし右リッヂからジャンクションンに出て居る。京大は十一時間（三名）を費やしている。

五、正面尾根（甲南ルート）

　主稜の右バンドの部分はテラテラの岩壁で殆ど手がつけられ相にないがわづかにリッヂと云えるものが主稜右に深く喰込んだ雪溪上端に認められる。此の岩壁の主稜寄りから右上方に向い全高距の三分の一（下から）の所で切れて壁となりブッシュに続き北槍の左下ピークから右下に下る判然としたリッヂと＞型に合している。一九三五年夏甲南パーティに依って登られたと学連報告に記載があるだけで甲南報告を見て居ないのではっきり尾根の性質が掴めない。而しバットレス核心に深くある中央壁及び僅かの隆起として認められるリッヂはブッシュをもつけず險悪さ登攀の困難さは想像に余りある。
（学連報告七号）

六、中央ルンゼ（関学ルート）

　中央壁の殆ど右に寄った部分に深くえぐれて常時懸瀑を形成している中央ルンゼは二三〇〇米最后のオーバーハングを乗切り上は頂上迄小さな沢リッヂの

ブッシュ帯で北槍頂上に続いている。カクネ里下部より見て北槍ピークの眞下中央壁に一際深く喰い入る陰影として容易に認め得る。ルンゼの高さは全高距の半分に及び右側にはっきりした稜がルンゼの上迄有る。一九三四年夏関学塩津氏等により登行を開始されて以来、一九三六年夏同じく関学によって初登攀がなされ一九四〇年夏一九四八夏と全部関学の手によって第二、三登されている。ルンゼは七つの滝を有しルンゼ右側の草付から取付く滝はすべて右側（左岸）を捲いて通過するが就中第三滝の完全なオーバーハング登行中の絶えざる落石、退却の殆ど不可能の事等は登攀者の努力と慎重を要するであろう。ルンゼ左側（右岸）岩壁は登行不可能でルンゼの中心通し及び左岸の壁をルートとしなければならない。(関西学連時報二〇、山小屋一五三)

七、直接尾根

　中央ルンゼ右のはっきりした稜の右の岩壁の更に右の北槍ピークよりダイレクトに斜右下に下っているのが之である。即ち下部は奥の雪溪の入口より少し入った所に終り、カクネから見た時此の尾根と更に右の右リッヂ（次項）とが北槍頂上に最もダイレクトに続いているので我々は之を直接尾根と呼んでいる。上部は殆どブッシュにおおわれているが正面バットレスの左側の各尾根に比し上部も急傾斜で下部は中央壁と同程度に殆んど垂直に切り立っている。加うるに取付に至る奥の雪溪は七月以降に於てはずたずたに割れ覗けば深淵は挑戦者を呑むが如くその險悪なる様相は名立たる劍穂高の諸雪溪に比すべくもない。脆岩の取付に至る迄クレバースに悩まされ取付地点が帯の一部をなし、一端雪より岩に移ればベルグシュルンドの底知れぬ深さに思はずセルフビレイのハーケンを打たずに居れず此処からは登る者も取付で確保をする者も常にシュルンドに引きずり込まれ相な感を抱かせる。正面バットレス中主稜と同じ位目立つ稜でありながら未だ登攀記録を聞かぬのも大体以上の様な理由によるものであろう。尾根は主稜程長くなく取付の岩壁の登行如何にかかっている。一九五一年夏我々は二回之を試登し共に失敗に終った。一回目はリッヂの末端に取付雪溪とほゞ平行に右上に登り右から迂回気味にフェースを直接リッヂに目がけて直登し何とかブッシュ帯に入ろうとしたが撃退され下降は更に困難を増し取付から四ピッチ程（三十米二名）の往復に六時間以上を費やしてしまった。第一登より見てこのフェース

上部の登攀は不可能となり更に雪溪に沿い岩壁下部を右上に登ると直接尾根の右に右リッヂとの間にわづかにコンカーブしたフェース様のルンゼ（我々は赤茶けたルンゼと云う）があり此のルンゼの岩壁の二十米程上部に僅かなテラスがある。此のテラスの上でルンゼはオーバーハングをなすが之を僻け右リッヂ側のフェースを登り再びオーバーハング上に出て直接尾根に出んと第二登を試みたのであるが赤茶けたルンゼのテラスに達しようとルンゼの右リッジ側のオーバーハングと脆岩に行手を阻まれ敗退した。而し未だ試みないルートとしてはルンゼのテラスに達する二十米程のフェースにルンゼの中心に僅かなリスがテラスにのびて居りルンゼの核心伝いに直登すれば恐らく達し得ると思うものがあるもビレイ地点に欠く事及びすぐ下に口を開くベルグシュルンドを考慮に入れなければならない。ハーケンは正面バットレス中この尾根に於て最も多数を必要とする。

八、右リッヂ

奥の雪溪に入れば直接尾根、赤茶ケタルンゼの右寄りに雪溪に凸角的に出ているこの尾根の上部は北槍ピークにダイレクトに至るもバットレス中右に偏している爲位置的に認められる事の少い尾根である。上部は七に比べ傾斜はゆるくバットレス右に大きく張り出し尾根の中程にはっきりとブッシュの暗緑色中に白く欠けた部分を認める。此処でリッヂは一端テラス状になっている。取付は赤茶けたルンゼのすぐ右の突角部から尾根の中程の白い斑点に達し、その后はブッシュ中を北槍ピークに至るがこの尾根は六月末迄に登られるべきものでそれ以后では取付にさえも達し得ない。尾根の下部の取付の右側はフェイスを形成し雪溪に落ち込む困難な岩壁である。

九、右ルンゼ（浪高ルート）

右リッヂの右のルンゼで北壁中最も右に位置する一九三五年三月浪高今西、中村両氏により積雪期に於ける北壁初登攀が此のルートに依ってなされた事は特記に価いする。北槍ピーク直下から奥の雪溪に入る最奥のルンゼで之の右支稜はすべて国境尾根から出ている。夏季ルンゼは無水なるも赤茶けたルンゼと共に降

雨があれば完全に滝にならう。浅いルンゼの落口は短いが殆どオーバーハングに近い様に思はれフェースの登攀は夏期に於ても敬遠したい程のもので積雪期は之が埋っているとしても垂直に近いホールドの悪い殆ど皆無と迄思はせるルンゼの中半が更にその上に続き登行の可能性を益々少くしている。初登攀以后夏季に於ても未だトレースされて居らず之をルートとしてあげる事も幾分躊躇される。（学連報告六号、浪高報告三号）

十、奥の雪溪

七、八に大体書いたが総括的に云うと左側（右岸）はすべて北槍に続く岩壁、正面は国境東側の懸崖で特に国境尾根を歩けば夫と分るキレット北槍の中間の赤褐色の岩塔の左に雪溪は回り一つの稜上のアンカレッヂに出る。此の岩塔の右側は国境尾根から覗くと垂直に雪溪を見下せる岩壁で之の登攀は絶対に不可能である。ルートは岩塔の左に入る雪溪からリッヂに出るがこのリッヂの下部は垂直なるもしっかりしたブッシュで懸垂の連続である。雪溪の右側（左岸）は洞窟尾根第一第二岩峯の側壁をなすが第二岩峯直下の草付及び第二岩峯上部のリッヂの側面から洞窟尾根に出、国境線に達する事も可能である。奥の雪溪は下から見れば北壁の右上に上る最も深いルンゼとして認め得るがカクネ里からの入口は洞窟尾根の下部最左端に限られて見えない。七月以降はルートにならず登路とする以外に錯雑した上部の景観及びフレバースは一見に価いするものである。一九三五年六月初旬小谷部氏の單独行の記録を見よう。「周りが物すごい岩壁だらけなのとこの雪溪自体非常に急で狭いので何だか上から圧え付けられる様な息苦しさを感ずる。国境東面の二十米余の壁にぶつかり雪溪は左に這入る雪溪が無くなってこのルンゼ上部の十米程の草を交えたアンサウンドの岩場を乗り越すと北槍寄りの国境から一直線に奥の雪溪へ落ちる嶮しい稜の途中一つのアンカレッヂに出る。此処から三十米垂直で所々にある小さな板により第二のアンカレッヂ、其処からはしっかりとした岳樺がありやがて傾斜も五十度弱となり密生した籔を漕いで国境へ出る。」（針葉樹八号）

キレット側

一、洞窟尾根

　奥の雪渓の右に在り今迄の様な稜でなく立派な尾根である。下部はカクネ里雪渓中に最も長く突出ている。この岬の部分の左上端からルートは始まる。取付の岩壁に二、三の洞窟が有り下からも黒い斑点として見える。取付の岩からリッヂに出る四ピッチ程が面白い。リッヂに出ればあとは楽で下から第一、第二岩峯有り第一は直登もしくは左へ第二は基部を右に捲いて再びリッヂに出るか其の儘草付のフェースをジャンクションに向えばよい。（針葉樹八号、関西学連報告七号、本報告記録）

二、キレット尾根

　洞窟尾根の第一第二岩峯右横の極く小さいルンゼは尾根末端の岬の右の雪渓に入っている。その右寄りはブッシュを交えて洞窟尾根のザイテングラードをなしている。グラートの右に急傾斜の細い雪渓があり雪渓の右にドームの如くそびえているのが此の尾根である。カクネから見た時ドームから二本のリッヂが左右に足を張りこの間の下部は僅かに雪をつけたルンゼとして認められるも上部は威圧的な岩塔の壁面で特に左上部の赤い岩は今にもカクネの核心に居る吾々におそひかからんとしている様に見える。而しこの尾根は岩塔から国境尾根に至るまでの間で恰度馬の背の様にすっかり傾斜を無くし横腹に上記の雪渓の上部の大きな残雪をべったりとつけている。洞窟尾根からのんびりした鞍部を見キレット小屋からすぐ目の前に馬の背を眺めた時一度あの上へと如何にも登行欲をそそらずには居れない。而し国境尾根のキレット左のジャンクションに達する所は馬がたてがみを振り上げた如く垂直に近い細い稜となっている。岩塔から左足に張った稜は足にたとえようか、右足はキレット沢下部の左側壁をなし途中一つのピークを越えるとカンテの如く岩塔にのびている。下部のピークの部分は籔が密生し途中はまばらな灌木をつけて登行の可能性を示している。我々の登ったのは左足であり洞窟尾根との境をなす雪渓に入り百米も登ると沢は二分する。右に入りガラ場草付から左足リッヂ上に出、下から見て岩壁上部の赤いくづれかかった

岩のすぐ上のリッヂ上に達し垂直に近い岩稜をブッシュに助けられて岩塔の頂に出た。このリッヂの左寄りに雪渓の分岐点からの側稜が略平行に上っている。

岩塔から眞正面に見えるキレットはくっきりと青空を覗かせ壯大さは予想外だ。キレット小屋の鞍部も目の前でキレットから発する雪渓と鞍部からでる沢が馬の背の右で合しキレット沢に通じている。この沢は立教が積雪期に下降路として用いられた事のある滝はないが始終落石に見舞はれる雪渓だ。（本報告記録）

三、キレット沢左尾根

キレット沢は中程で三分し、（１）は左に、（２）中は下降ルート、（３）右はキレット沢右尾根側面のガラ場に終る。キレット沢左尾根は（１）（２）間の短い逆層のだが傾斜の急でない稜で一九四三年夏浪高加藤（現阪大）等に依り記録されている。キレット側一帯にそうであるが特に落石は甚だしい。

四、キレット沢

先に書いたが（１）は最も深く切れ込み両岸（キレット尾根及びキレット沢左尾根）は倒れかからんばかりの岩壁で落石烈しくクレバース多いがキレット尾根岩塔に向うフェースは岩も堅そうでホールドも好く岩登りによかろう。（３）は特に言う事もない。（２）（３）の間（２）寄りの所から岩登りに適した短い岩稜が伸びキレット沢右尾根ジャンクションのすぐ左に一寸した岩峯を国境尾根に突立たせているがこの岩峯はサウンドで多種のフェースを有し岩登り練習に快適の様である。（２）については下降路の項及び本文記録を参照されたい。

五、キレット沢右尾根

キレット沢（３）を左側面に喰込ませているこの尾根は国境線五竜鹿島間の最も高いピークに続くので相当長い。下部カクネに面した部分は切れて相当の岩壁である。（３）の下はごく平凡な斜面で之からリッヂ上のブッシュ帯に出ればよい。ジャンクション近くは相当急なフェイスで最后の箇所が少し悪い。一九四三年夏浪高徳永、家田（現阪大）及び今夏の二回の記録がある。（本報告記録）

六、ロノ沢尾根

中ノ沢を隔てた五竜側の尾根は上部の中ノ沢側は大分ガレている籔尾根だ。ロの沢はカクネ里の雪渓中側方にのびている最も大きなもので中頃迄おとなしいが上部は一直線に国境尾根に上り上部は赤い土砂のガレをなしている。ロの沢の右にあるロの沢尾根も長い。下部は籔上部はガレ場で一九三五年夏浪高佐谷氏等の登攀記録があるので之を掲げておく。「雪渓（ロノ沢）中途で右尾根に取付き途中這松の茂った壁で中断され右へトラバース浅いルンゼに入り草付より再び尾根に出草付這松を漕ぎ国境へ」高距が大で相当時間を喰いそうだ。（関西学連報告七号）

天狗尾根側

カクネから急にせり上がっている小さいヤブのリッジと短い雪渓の幾つかの連続である。中の沢に恰度相対して天狗尾根側では最も長く雪渓の続いている沢がある。上部のガレ場からの落石が畳々と積み重なり雪渓はくの字形にガレ場から右に折れ天狗の鼻に向うが稜線へ出る百米程は熊笹と灌木の密生で殆ど登攀の対象とならず、稜線に出れば大川沢に入る曲り沢をはるかに下方に認め得るだけで尾根の見通しは全然効かない。次は天狗尾根最低鞍部（天狗の鼻から二段目のコル）に上るもので扇形残雪下のルンゼ左のリッヂの籔漕ぎにより之に達す。詳細は本報告記録の部を参照されたい。第三に前記したピーク尾根 P1 から扇形残雪をトラバースし扇形残雪左の草付を十分も登ると容易に天狗尾根に達す。時間的に天狗尾根に達する最も早いルートである。すべて天狗尾根側は国境キレット異り籔密生し岩質は堅硬である。

天狗尾根

一九三二年五月同志社兒島氏が東尾根荒沢の頭から天狗尾根を下りビバークしてカクネに至られたのが最初の記録であり、一九三七年三月浪高松林氏が遭難された尾根である。天狗の鼻より下った最低鞍部から籔をつけた瘤を三つ位越し

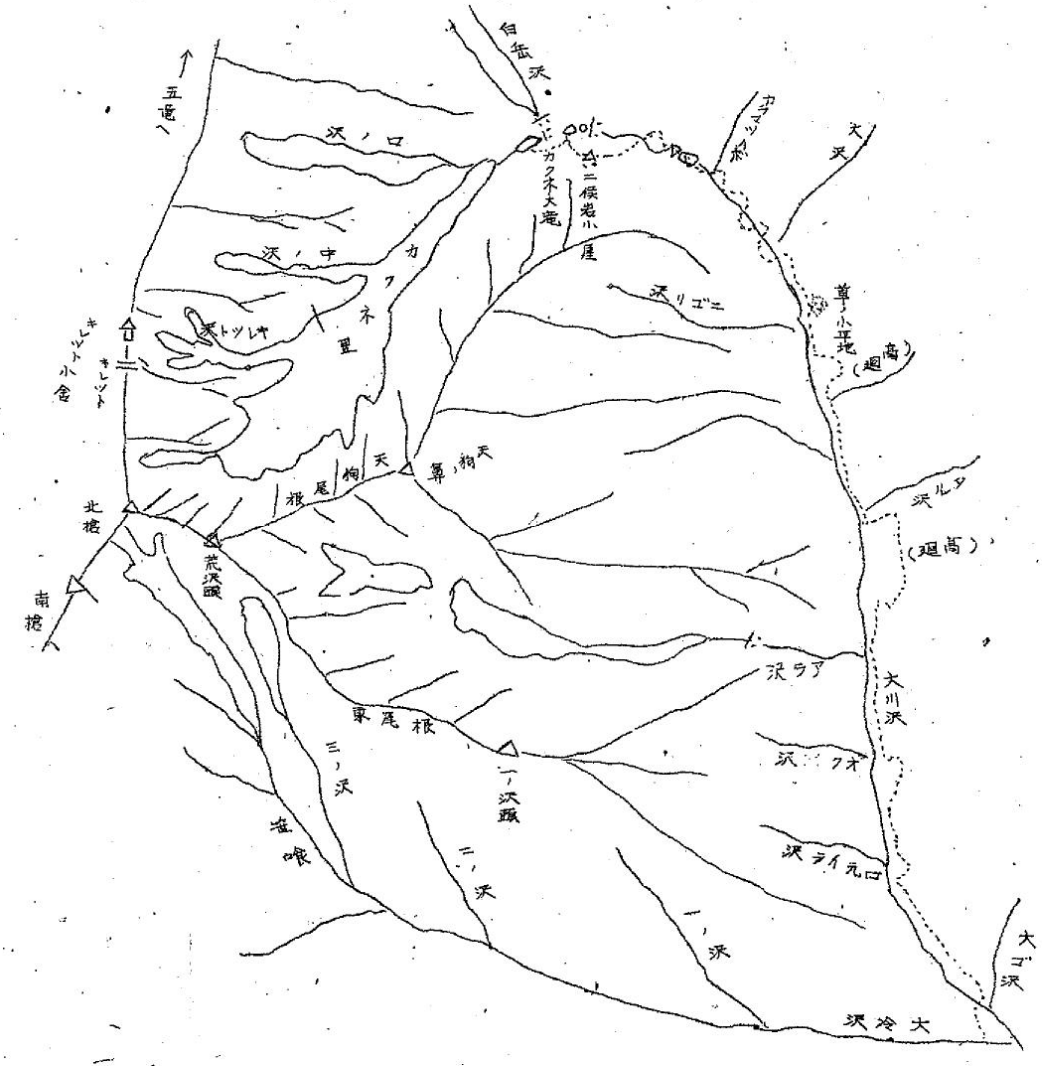
た上に四角の特異な岩が目につく。之はその形から小舎岩と称せられ扇形残雪左端殆ど眞上にカクネからも見える。荒沢北俣北稜のジャンクションに当る小舎岩の上に二つの岩峯が相接し下から第一第二岩峯と云はれる。扇形残雪の眞上に認められ、天狗尾根から見ると二つのドームにより形成されている様だ。最低鞍部から岩峯の辺り迄は籔が密生し殆どカクネ側に之を漕いで行く。荒沢側はすとんと落ち荒沢の雪渓が落石で殆ど褐色に変色し、北俣南稜北稜は北壁バットレスを遙かに凌駕する險悪さで荒沢奥壁をかざり之等にアタックを敢行した浪高今西、小林氏等更には想像だに絶する積雪期完登の東大佐谷氏（浪高 OB）東京商大小谷部氏等の努力に対して感慨は盡きぬものがある。東尾根第一第二岩峯を荒沢を隔てて左に見、ルートはカクネ側の割に傾斜のゆるい籔中を過ぎ、小舎岩はどちらを捲いてもよい。第一第二岩峯は眞正面から取付き大体荒沢側即ち左上に向ってフェースを登る。此処から上は荒沢側もゆるく這松程度で籔も少くガラ場がふえて来る。荒沢の頭に（天狗尾根、東尾根のジャンクション）至れば僅かに踏跡もあり気持ちのよい尾根筋のピークを三つも越せば北槍の頂上である。（針葉樹八号、本報告記録参照）

文　　献

「山岳三六年二号」「山五号通刊一四一」
「山小舎一五三」「ケルン一三」
「関西学生山岳連盟報告三、四、六、七号及び時報二〇No.3」「針葉樹八号（東京商大報告）」
「立教報告五、七、八号」「浪高報告三号」
「リュックサック（早稲田報告）九号」
「大阪薬専報告一、二号」

鹿島槍岳東面概念図

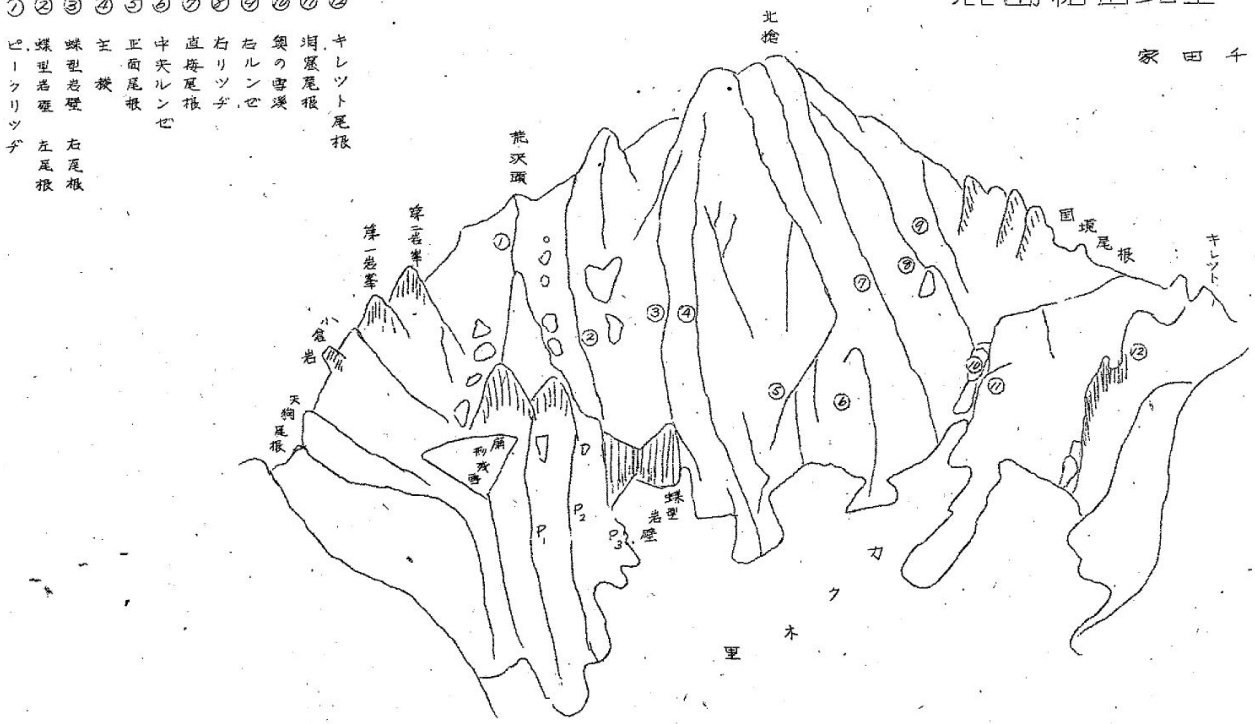
家田千尋



カクネ里より見たる

鹿島槍岳北壁

家田千尋

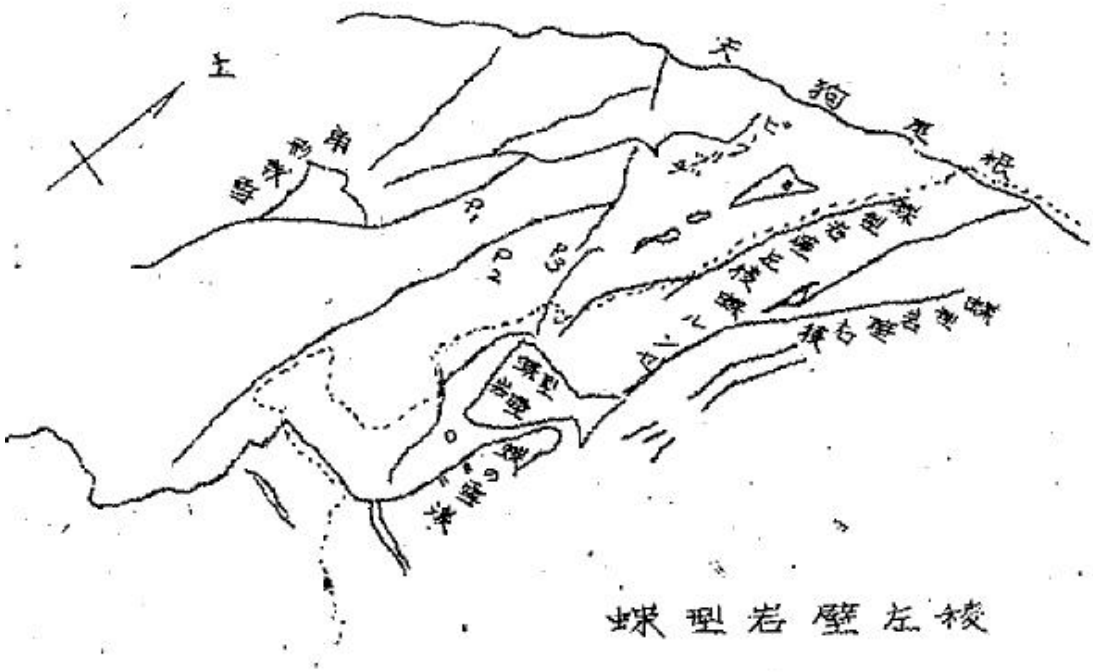


登　攀　記　録

○　蝶　型　岩　稜　左　稜

七月二八日（快晴）パーティ　家田、林、久保、大村

B･C（六･三五）－洞窟尾根の岬左下端（七･四〇）－雪渓を左にトラバース、蝶の雪渓の一つ下の俣（P2･P3 間の雪渓俣）に入る。正面は大きく口を開いた縁



割れと岩の垂壁で取付き得ず。左端雪と岩の接したる所を見つけて渡り、左へトラバースしてリッヂ P2 上に出、籔中を少し登ってから小さなバンドを伝って右へ下り P2･P3 間のスラブに出る。アンザイレン。浮石の乗った緩傾斜スラブのトラバース。終って P3 側面の籔岩場を登り P3 上蝶の羽の左下、P3 稜がやや平になった部分に出る。稜上前進、すぐ蝶の岩壁を含んで横にひろがる急傾斜に行きあたる。若し蝶の雪渓にクレバスが無ければ雪渓をつめて左へとりここに達する事が出来ると思う。

急な壁の裾に沿って籔中を左へトラバース。小ルンゼ（ひどく凹凸だが完全な岩溝）を一本見送り次の岩場から上へ向う。傾斜は急だが気味の悪い位良いホールドがあり登りきると草付。これも急だが籔まじりだからどうにか登れる。再び P3 上に出るとすぐ向う側に天井ルンゼの豊かな水が流れて居る。蝶の堅い岩が侵触を妨げた為にこの様な緩傾斜の浅いルンゼで残ったものであろう。天井ルンゼ又はャルンゼなる名称も底高で両側は切落ちて居るここの横断面を想像して

つけた名である。ルンゼ水辺へ簡単に下り昼食（一〇·三〇－一一·〇〇）左稜側面に取附いてコンティニアスに籔の中を登り少し左に捲き気味に取って左手のルンゼ（ｙルンゼ右俣の一つ）に入り登りつめて完全に左稜上に出、ザイルを解く（一二·〇〇）ここより左手ｙルンゼをへだてたリッヂは甚だ顕著な岩峰を有して居るのでピークリッヂなる名をつける。這松と岩との稜上の登行。左稜が上部で天狗尾根側面に消え込むあたりの風化した岩場はちょっと厄介。天狗尾根直下の硬い岩場を直登して天狗尾根上（一·〇五）後はぶらぶらと北槍－キレット－B·C（五·〇〇）

（久　保　記）

○　直　接　尾　根

七月二三日　　二木・細見

合宿前に調べた文献に於けるリッヂの名称の混乱、即「針葉樹 8 号」は此の直接尾根を G4 主稜と名づけて居るのに対し、浪高報告に於いては針葉樹 G2’にあたる尾根を主稜（現在我々はこれに従っている）として登攀文をかかげて居る為、この両者を混同した私達は合宿の手始めとして過去に登られた主稜をトレースして居るつもりで実は未登の直接尾根へ取付いて居たのである。B.C. 六·三〇発－洞窟尾根末端 七·五〇－これより雪渓の数多いクレバスの乗越に非常な苦労をなし、一一·三〇 赤褐けたリンネ左下のフェイス直下、二木トップフェイス右端のクラックに取附いたが極めて困難。更に右のフェイスを試す。私はセルフビレイして確保、5m 上ってオーバーハング乗越しにハーケン打つ、釣上げを行うが手懸りつかめずやり直す為に下るときバランスを失してハーケンをにぎったがその時何の手答えもなくピトンは抜けてしまった。その後の二人は極めてみじめな有様だった。ザイルにぶら下った二木はブラブラ下で揺て居る、その下は底知れぬ山側亀裂が口を開いて居るし綱は胴をしめつけ確保のピトンがグンニャリ曲がって居るのは耐えられなかった、それでも何とかして二人は一緒になり放々の態でテントへ下った。

○　再　度　の　企　て

七月二五日　　家田・二木・細見

第一回の失敗より直接尾根の困難さは再認識され吾々も本腰にならざるを得なくなり、困難な雪渓登攀には二人より三人のパーティが安全であるとしてチーフリーダーが加はった。

六･五○ B.C 発、赤褐けたリンネは容易に入れた、二木トップ、リンネが垂直に落ちる所、右のチムニーに入る、チムニーが開き過ぎ更に岩質もろく困難さは最上級の言葉があてはまるだろう、結局駄目と知り戻る事にする、とに角なんとかして三人相会する。すでに正午を廻って居るので次の機会を志ざして下さる心は重い。

（細　見　記）

一九五一年

秋山・冬山

北岳バットレス、頂上幕営、鳳凰山

我々は発会以后二年の冬・春の四回の合宿を全て後立山で行って来たが、正月の白馬附近は剣と共に天気が日本アルプスでも最も悪く、穂高で一日晴れの時でも半日しか晴れず従ってラッシュに適した日は合宿中一回しかなく多くの部員が下でラッセルに終始するというのが普通であった。それで今度の冬山は皆が何回も登れる様に比較的天気の良い南アルプスで行う事に決った。南の中でも四九年十一月新雪におおわれた東北尾根下部側稜に新ルートを開拓していた北岳バットレスを目標とする事となり、九月に四名が先づ入った。此の時は従来登歩渓流会松濤氏等によって第一尾根側から登られたのが唯一の記録とされていた第二尾根に対し、反対側からの新ルートを開拓したのを始め、第五尾根、第一支稜、東北尾根等を登った。

次に十一月には荷上げに広河原小屋に三名で入り、第一尾根支稜を登った。所が此の頃から有力な隊員中に家庭の不幸や、卒業試験の都合で冬山に参加不能の者が出て冬山は参加者五名、しかもその中二名は中途下山の必要があるということになった。又南へ行く機会にバットレスよりも広大な冬の稜線を歩き我々に不足していた三千米における冬季の高処露営の経験をつむ必要があるという以前からの考えが再燃し、部長先生もその考えを支持されたので、バットレスを中止し、北岳頂上にテントを建設し農鳥を目標とすることになった。予定通り五名で赤ナギ沢より広河原小屋に入り、大樺に第一キャンプ、北岳頂上に二人用のテントをはり、二人泊り三名は広河原へ下った。頂上の二名は天幕の破損等の悪條件のため、中の岳迄行って広河原小屋に下った。一方先に下った三名の中二名は予定通り広河原峠より下山し、一名は單独で広河原峠より鳳凰に縦走してヴィバークし、広河原小屋へ下り頂上の二名と合体し下山した。以上が我々の秋冬の北岳の行動の概要である。北岳バットレス、第二尾根及び冬山の詳しい報告は紙面の都合上春山と共に次号（六月発行予定）にゆづることにした。尚以上の外十月と十二月に奥穂高に各一パーティを送った。

尚冬山は北岳隊の外に一隊は八方尾根にテントを張り、唐松往復及びスキー練習を行った。　　（大　島　記）

我　等　の　歩　み

── 回 顧 と 展 望 ──

私達が阪大山岳会を結成してから三年、時報も三号を出す事になったが、誌面の都合上各合宿の経過等も單に記録欄に書くに止めたのでここに各合宿の意図目的等を我々の発会以来の経過と共にまとめて書く事にした。戦前阪大の医、工、理三学部には別々に山岳部又は山岳スキー部が存在していた。之は大阪帝大が出来る前の大阪医大、大阪工大の山岳部が大阪帝大になってからも校舎が遠く離れていた関係で、その儘合同しなかったからであろう。先輩には関西学連の育て親の一人である水野祥太郎氏や初期の北鎌の開拓者の遠藤常忠氏或は盛岡英次郎等も居られるが、何分学生総数も少なく学業も忙しい理科系のみの大学で然も各学部に分れて山岳部があるのだから、二、三の個人的とも言えるものを除き大してまとまった記録も生まれなかったのは当然であろう。高校山岳部で活躍された方は阪大入学后もむしろ高校 OB として母校山岳部と行を共にする事の方が多かったらしい。戦后学制改革案が発表となり、新制になると教養学部として各学部志望者がまとまって授業をうける事となり、旧制高校（浪高、大高）も阪大に吸収されることになったので、どうしても三学部の山岳部を合同する必要を痛感し、いくつかの前駆的な合同山行の后、統合した阪大山岳会として発会式をあげたのは四九年の六月であった。直ぐの夏山は劍で少人数で岩登りを中心とした合宿を行った。九月には学制改革で遅れていた新入生の入学があり数人の新入部員を迎えた。十一月の秋山は少人数の三隊に分れる方針で、北岳バットレス、木曽駒、御岳に行ったが此の時は冬山に近い位の積雪に恵まれた。冬山はラッシュを主眼として猿倉の下の北股を根據とし白馬主稜の冬季初登攀を行った。（中京山岳会と偶然に行を共にした）スキーの初心者は細野で練習し後半は北股隊と合同した。続く春山は新人の訓練と国境の稜線を長く歩く目的で遠見より鹿島槍往復の計画を立てたのであるが新制は入学の遅れた関係上四月になってから漸く期末試験があることになり第一次春山は旧制部員のみとなり、結局少し計画を長くして八方尾根より鹿島槍の往復に成功した。往復ではあるが唐松小屋を利用し、最后は五竜頂上の雪洞から鹿島槍迄往復したりしたので極地法ではなく、むしろ根據を逐次進めたラッシュ形式と言えるものである。

続く四月末には試験の終った新制部員に家田をリーダーとして加え槍より燕へ縦走した。雨天の中を大天井附近で夜を明かすといった苦労もあったが、皆良く頑張ってくれた。以上の詳細は一号二号に報告してある。

五十年度夏山は前半を岩登り、後半を縦走に分け前半一隊は新人の訓練を主眼に白萩と黒部から劍で合宿し、他の一隊は冬春の偵察を兼ねて南股にテントを張った。その后劍隊は立山より針之木谷南沢出合に至り南股隊は后半の食糧を補給して針之木峠より南沢で劍隊と合同し後半に入り三隊に分れ、A、東沢・槍・穂高、B、針之木・烏帽子・雲の平・有峰、C、後立山縦走を行った。頭が五つ、尾が三つという厄介な計画も連絡がうまく行った。太田敬氏も書かれているが大勢の岩登り合宿後少人数で縦走すると、山の楽しさがしみじみと味わえるであろう。特に人に殆ど会えぬ谷をコースにすると特にその感が深い。

九月になり来春は後立山全縦走に全力をあげることに決定した。我々の戦后五年の後立山研究のしめくくりをつけ度いという意味もあったのである。冬山は前述の経過より二年部員も冬のテントの経験を持たずに終ったので、杓子の双子岩に猿倉を経由してテントを張り雪洞との比較等を行い更に双子尾根を全員で往復する計画を立てた。春に備える為の経済的理由より合宿期間も短く予定し、又テントへの食糧運搬計画の不備が豪雪の際にはっきり示されて二十九日の快晴にも杓子頂上を目前に見ながら、引返す次第となった。我々の計画が今迄順調に行っていたので此の計画を軽視し精神的にもゆるみがあったのである。とにかく今迄ラッシュを行って来た我々に食糧の輸送、配分の計画等にも細心の注意をはらうべきことを教えたのである。

春山は予定通り後立山の全逆縦走を行うことになった。積雪期の後立山縦走は立教が手をつけたが、針之木迄の全縦走は関学によりなされた記録が一つあるのみである。又逆縦走は今迄行はれていなかった。立教、関学は秋に十分荷上げをして行っているが我々は秋の荷上げは全く行はずサポート隊を活用する方針であった。縦走隊の行動が天候に左右されるだけにサポート隊の計画も中々ややこしいものである。そしてサポート態勢は全く整って縦走隊の来るのを待っていたのであるが、縦走隊と鹿島槍迄行を共にする予定の坪井君のスリップにより全計画の中止の止むなきに至ったのは全く残念であった。スリップ直后現場付近に雪洞を掘り手当をして負傷者を無事下山させることが出来、又鹿島槍にあったサポート隊にも直ちに連絡をつけ得たのはせめてもの慰めである。結局一年部員の坪

井君には少し荷が重すぎた様であるし、又冬山にも此の計画の偵察に全力をつくし大沢小屋に一隊を送って生活條件を良くしておく等の注意が必要であった。

五一年の夏山合宿はカクネ里で行った。カクネは昔早大が夏の合宿地としてえらび失敗している如く新人のトレーニングに向いた所に乏しいし岩も快適とは言い難い上に色々な事情でサブリーダー級が参加できず一年二年部員が大半で家田、久保等の苦労も多かったと思う。だが北槍直登の新ルートの開拓にはアタック 2 回の末失敗したけれども色々なルートを登り、全く無人の境地で朝夕北壁を眺め底知れぬクレバスを毎日渡って穂高、劍では見られぬスケールの大きさをつくづくと味った。

夏山も終ると冬山は北岳と決定した。此の後の経過は本文にもあるので略すが九月、十一月の 2 回北岳バットレスに、又十月、十二月には穂高行があった。その中九月には北岳バットレス第 2 尾根に新ルートに成功した。

冬山は予定通り北岳と二年部員以下の八方尾根生活唐松とに初めて分離し、北岳は家庭の不幸や卒業実験の関係で発会式以来の主動メンバーは一人も参加できず、五人でしかも二人は途中下山の必要があるという少人数であったがとにかく相当頑張ってくれた。

五二年春山は我々としては始めて極地法を行う予定で杓子尾根より不歸唐松往復を猿倉を B.H に第三キャンプ迄つくってやる予定で準備中である。昨春の後立山縦走は不成功であったが昨年度に得た色々の体験を新しい世代の人達が活かし今後その成果が実る事を確信している。何しろ一年の学校よりの部費が数千円という経済的貧弱さで装備の補充も苦しいが段々新しい OB も増えるから将来は何とか出来ると明るい希望を持っている。　　（大島記）

山　行　記　録

一九五〇・六～一九五一・八

―― 一　九　五　〇 ――

六月二七日　惣合谷右俣　　二木、坪井

七月七日－一四日　白馬－劔立山　　多喜野、浜崎

〃　七日　　大阪発

〃　八日　　細野－白馬尻

〃　九日　　白馬岳登頂、清水岳を経て祖母谷へ向う途中大雨に会い清水小屋泊

〃　十日　　祖母谷でキャンプ

〃　十一日　仙人谷を経て池ノ平小屋泊

〃　十二日　眞砂沢出合を経て劔沢小屋泊

〃　十三日　劔岳登頂、長次郎雪渓を下る、この日は地獄谷泊

〃　十四日　立山登山、粟巣野より下山

七月九日　　惣合谷右俣　　細見、坪井、川島

七月十・十一日　夏山トレーニングキャンプ

於道場　　篠田先生、加藤、大島、松久、細見、近、山本、川島

久保、徳永

七月十六日　芦屋川本流滝谷－石ノ宝殿－オリエンタルホテル－西山谷

久保、二木、平井

〇夏山　　七月十九日－八月六日

前半は劔及南股で合宿し、後半、雲ノ平、東沢、後立山の三パーティに分れて行動した。

前　　半

（1）南股合宿

家田（L）、大島、松久、細見、尾藤、山本、坪井、由比浜

七月十九日　湊町発（一七･五〇）

七月廿日（晴）　（八･一五）四谷着、細野（一二･三〇）－南股取入口（一六･三〇）BC 設営

七月廿一日（晴）　第一回アタック

A 隊　　大島、坪井、山本

BC（七･五〇）－三日平（一〇･一〇）－鑓南山稜下部にてガスの為ルートを誤り引返し（一四･〇〇）－鑓温泉（一七･二〇）－BC

B 隊　　家田、細見、尾藤

BC（七･四〇）－不歸沢（一一･三五）－キレット－鑓温泉で A 隊と会い共に BC に歸る。

C 隊　　松久、由比浜

BC（七･四〇）－唐松沢（一一･三五）－d ルンゼ（一四･三〇）急斜面で且雪の状態が悪い為、アンザイレンし、ステップを切りつつ登る。唐松小屋（一六･〇〇）－八方尾根八方押出を下ろうとしてルートを誤り滝の連続した沢の途中で日没の為、ビバーク

七月廿二日（晴）　C 隊歸投

七月廿三日（晴）　第二回アタック

（六･四五）全員 BC 発、南滝を捲く際に尾根の中腹にある四米程の一枚板の下迄来た時（九･一五）急斜面をものすごい勢で転って来た石がバウンドし、あっと云う間に尾藤に当った。耳殻の裂傷ですんだのは不幸中の幸であったがこの為、予定の計画を変更せざるを得なくなった。即、松久、細見、家田が負傷者について引返し他の者は不歸沢をつめることになった。

（一〇･〇〇）発－不歸沢（一〇･五〇）－キレット（一五･〇〇）－唐松小屋（一九･〇〇）－黒菱小屋（二二･五〇）泊

七月廿四日（晴）　BC 歸投、尾藤は手当を終へ歸阪。

七月廿五日（快晴）　第三回アタック

山本、由比浜　BC（八･四五）－三日平（一〇･二五）－杓子沢－国境稜線（一六･一五）－白馬岳（一八･〇〇）－大雪渓－猿倉（二一･五〇）－BC（一･三〇）、家田、大島、松久、坪井、細見、後半計画参加の為細野へ下る。

七月廿六日　夜半歸りし為終日休養

七月廿七日　BC 撤收下山

（２）劔合宿並立山縦走

A 隊　加藤（CL）、久保、小林、白萩川経由

B 隊　川島（L)、二木、近林、北條兄弟、黒部経由

七月十九日　大阪発（一九･五〇）

七月廿日（晴）

A 隊、富山（七･一六）－上市（九･〇〇）－バンバ島水電取入口水屋（一七･三〇）泊

B 隊、三日市（八･四〇）－宇奈月（一〇･三〇）－阿曽原（一五･〇〇）

七月廿一日（晴）

A 隊、バンバ島（七･二〇）－白萩川－小窓（一九･一五）－二股（二一･〇〇）

B 隊、阿曽原（七･〇〇）－仙人谷－池ノ平小屋（一六･三〇）－二股（一八･〇〇）

七月廿二日（晴）　眞砂沢出合に BC 設営

七月廿三日（晴）　源次郎尾根

BC（八･〇〇）－源次郎取付（九･二〇）－一峰（一一･一五）－二峰（一二･一五）－劔岳（一四･〇五）－平蔵谷（一五･二〇）－BC（一六･四五）

七月廿四日（晴）　八峰上半

BC（八･四五）－五六のキレット（一一･〇〇）－六峰（一一･四五）－八峰（一四･一〇）－ニードル（一五･三〇）－長次郎雪渓（一六･三五）－BC（一七･五〇）

七月廿五日（晴）　八峰下半及 BC 撤收

小林、川島、二木　BC（七･四〇）－一二のコル（一〇･〇〇）－一峰（一〇･二五）往復－五峰（一一･五〇）－五六のキレット（一二･三五）－BC（一三･〇五）　BC 撤收（一五･〇五）－三田平（一七･四〇）

七月廿六日（晴）　立山縦走

三田平（七･一〇）－別山乗越（七･五五）－雄山（一〇･二五）－ザラ峠（一五･〇五）－五色原（一六･〇〇）

（３）南沢終結、南沢出合より五百米上流に BC

１．細野より食糧荷上げ

家田、松久、大島、細見、坪井、丸山庄司

OB 大久保、四宮は二六日大町にて合流

七月廿六日　細野－大沢小屋

七月廿七日　針ノ木峠を越えて南沢へ劔パーティと同時（一六･四〇）着く。

２．劔パーティ

七月廿七日　五色原（一二･一五）－刈安峠（一三･三〇）－平小屋（一四･五〇）－南沢（一六･四〇）

七月廿八日　雨の為全員停滞

林、北條兄　針ノ木峠を越え下山

３．OB 岡本及伊藤

七月廿七日　富山より立山温泉泊

七月廿八日　ザラ峠を越え平の小屋迄来て雨の為泊る。

七月廿九日　早朝南沢 BC へ伊藤連絡

後　　半

（１）雲ノ平パーティ　大島（L)、久保、小林、近

針ノ木－烏帽子－雲ノ平－薬師沢－有峰

七月廿九日（曇後雨）　後立山パーティと共に針ノ木峠に上り小屋に泊る（一五･〇〇）

七月卅日（曇后雨）　針ノ木（八･三〇）－蓮華岳（九･四〇）道路工事の最中で、北葛乗越二つ手前の岩峰迄切別が付けられていた。北葛乗越（一一･二〇）－七倉岳頂上にて雨のためルートが分らずキャンプ（一七･〇〇）

七月卅一日（晴）　（一一･〇〇）発、ルートが分らず暫く探した後、最高点より西北方に急斜面を下り踏跡を発見。東沢の頭（一二･五〇）－船窪乗越（一三･五〇）ここからは切別道を進む。船窪岳（一五･四五）－不動南端（一七･五〇）－南沢（一九･二〇）烏帽子公園北端（一九･五五）

〔山名について、二四五三･五△のあるのが七倉岳、その西の地図に船窪岳とあるのは誤りで之は東沢の頭、その西が船窪岳〕

八月一日（晴）　早朝、小林、近下山

大島、久保（九･一五）発－烏帽子小屋（一〇･二〇）－東沢乗越（一六･一五）－水晶小屋跡（一七･三〇）ここで東沢パーティが数時間前通過した跡を見出す。

八月二日（晴）　黒岳往復、（八･五五）発－祖父岳（一〇･二〇）之より雲の平に進む。草原と榧松の中の散岩は牧場に遊ぶ牛を思わせる。ケルンの導

くままにこの牧場の中を登って広濶な南稜に出れば、まるで天下の名園でも通っている様である。二四六三･九△（一四･二五）－黒部川（一七･五〇）－薬師沢（一九･三〇）

八月三日（晴）　（一一･四〇）発－薬師沢－二二八二（一六･五〇）－太郎山－太郎小屋（一七･三〇）

八月四日（曇）　（七･三〇）発－眞川（九･三〇）－小畑尾峠（一一･一〇）－有峰（一五･〇〇）

八月五日（雨）　（七･一〇）発－大多和峠（八･四五）－神岡鉱山鉄道土駅（一三･三五）軽便に便乗、高山線猪谷駅より歸阪。

（２）東沢パーティ　東沢遡行、裏銀座縦走

家田（L）、加藤、細見、丸山庄司

OB 大久保、岡本

七月廿九日（雨）　雲ノ平、後立山両パーティを送り出した後（一〇･三〇）BC 撤收－平ノ小屋（一一･四〇）－黒部中廊下遡行、雨の為（一六･〇〇）二つ目の沢を渡った所でキャンプ

七月卅日　（一〇･三〇）発、東沢出合（一五･〇）で雨の為キャンプ

七月卅一日　（八･四〇）発－東沢遡行－（一八･二〇）キャンプ（二二〇〇米附近）

八月一日　（九･四五）発－東沢カール底（一一･一五）、（一二･〇五）左側から大きな雪渓が入って来ている所で二隊に分れ、加藤、大久保、細見は源流を、家田、伊藤、岡本、庄司は雪渓をつめた。東沢乗越は雪渓上端である。赤岳と水晶間のコルで合流し、三俣蓮華へ向う。ここで大久保、庄司は水晶岳（一五･〇五）往復す（一七･一〇）蓮華小屋着

八月二日　（八･五〇）発－双六小屋（一〇･三〇）－樅沢岳（一一･〇五）－槍ノ肩（一五･一〇）－本槍往復（一六･三〇）岡本、伊藤槍沢より下山

八月三日　（七･四〇）発－中岳（八･三〇）キレットを下る頃より雨が降り出したので最低鞍部（一〇･三〇）より横尾本谷を下る。涸沢出合（一二･〇〇）－岩小屋（一三･〇〇）－徳沢（一五･〇〇）

八月四日　上高地より下山

（３）後立山パーティ　針ノ木－白馬縦走

川島（L）、二木、北條、坪井、松久、四宮

七月三十日（曇後雨）　針ノ木小屋（八･三〇）－針ノ木岳（九･二〇）－スバリ岳（一〇･一〇）－赤沢岳（一一･四五）－鳴沢岳（一二･五五）－岩小屋沢（一四･三五）－種池小屋跡（一六･〇〇）冷迄行く予定であったが四宮不調の為、ここでテントを張る。

七月卅一日（晴）　（一二･二五）発－爺子岳（一三･〇〇）－冷小屋（一四･〇五）縦走を続ける川島外三名はここから下山する松久、四宮に見送られて出発、鹿島北槍（一七･〇〇）－キレット小屋（一八･〇〇）雨が降り出したので小屋に泊る。

八月一日（晴）　（七･〇〇）発－五竜岳（九･五〇）－唐松小屋（一四･〇五）－不歸キレット（一六･三〇）－天狗の泊場（一九･〇〇）

八月二日（晴）　（一二･〇〇）発－白馬頂上ホテル（一四･二〇）－白馬頂上往復－白馬尻（一八･二〇）－北股水電取入口（一九･三〇）

八月三日　細野を経て四谷より歸阪

八月十二－十八日　槍岳－常念岳－大滝　住吉

九月一－三日　比良堂満岳北面ガレ

大久保、久保他二名、ジェーン台風に遭偶し這々の体で逃げる。

九月二・三日　六甲五助谷－紅葉谷道－有馬、宝塚へ　大久保、大島、久保

十月八日　六甲座頭谷－最高峰－射場山－紅葉谷－蟇滝七曲滝－六甲駅

大久保、久保

十月八－十一日　鈴鹿合宿

先発隊　家田（L）、宮本、林、岡田

後発隊　川島、浜崎、多喜乃、向井、四宮

八日（晴）　九時先発隊湊町発、藤内沢出合岩小屋に泊る

九日（曇後雨）　先発隊は前尾根から御在所頂上に立つ。午后雨の中を後発隊到着

十日（小雨）　後発隊は前尾根より御在所へ、先発隊は藤内滝をトラバースしようとしたが雨でぬれていたので中止して前尾根を後発隊の後を追う。

十一日（雨）　雨の為、愛知川下りを断念し、下山す。

十月廿二日　道場百丈岩

大島、家田、久保、山本、二木、川島、坪井、細見

十一月一ー七日　劔　岳　尾藤他一名

一日（快晴）　十九時大阪出発

二日（晴）　富山着、四時頃追分小屋着

三日（晴）　六時半出発、美松坂より雪を見、天狗原では一～二尺よくクラストしている。雷鳥沢の途中よりアイゼンをつけ十二時半乗越着。積雪二～三尺

四日（ガス烈風）　七時頃小屋を出、劔沢小屋を経て別山尾根に出る。ザク雪をのせた這松岩角を越えて十時頃前劔の頂上に立つ。天候悪化の為引返し乗越小屋に歸る。

五日（曇ガス）　下山。雨の為地獄谷泊。

六日（雨）　七時小屋に分れて、股までもぐり乍らどんどん下り、その夜七時半富山発にて大阪に向った。

（尾　藤　記）

十一月十九日　裏六甲　OB 大久保、川島、他一名

十一月廿三日　仁川ムーンライト　川島

十二月三日　仁川バットレス他　OB 大久保、林、大村、川島

冬　山　杓子双子尾根

一隊　家田、細見、尾藤

二隊　大島、加藤、住吉、坪井、田島

三隊　四宮、山本、大村、近、岡田、篠田先生

十二月廿二日　家田、加藤、大島、大阪発

〃　廿三日　家田等細野着、先着の細見、四宮は北股水電取入口小屋（BH）へボッカ。川島、田島、坪井、尾藤、林、大村、近、山本、岡田、大阪発

〃　廿四日　家田、大島、細野→猿倉→北股、午后加藤、四宮、細見、尾藤、田島、川島、坪井、北股へ、大島、細野へ下る、山本、大村、近、岡田、林はスキー合宿に入る。

〃　廿五日（高曇）　AC 設置

一隊及加藤、坪井、四宮

北股（八･三〇）－猿倉（一〇･三〇－一一･三〇）－小日向コル（一四･〇〇）AC 設置、一隊 AC 入り。加藤等北股に下る。田島は北股より細野に下り、大島、住吉と共に北股へボッカ。

〃　廿六日（雪）

一隊　偵察の為前進したが視界悪く直ぐ引返し二隊を迎え入れるため AC 横に雪洞を作り之に入る。

二隊　北股（一一･〇〇）－猿倉（一三･〇〇－一四･〇〇）－猿倉台地（一六･〇〇）ラッセル甚しく引返し－猿倉（一七･〇〇）四宮、北股より細野へ下る。

十二月廿七日（風雪）

一隊　食糧欠乏の恐れあるため下山せんとした（一〇･三〇）が、雪崩の危険を考えて引返す。

二隊　猿倉（九･〇〇）－猿倉台地（一〇･二〇）腰までのラッセルに悩みつつ登るも視界悪くルート不明の為引返す（一二･二〇）－猿倉

十二月廿八日（晴）　一、二隊交替

一隊　AC（九･四〇）－猿倉台地にて二隊と会う（一〇･三〇）－猿倉（一一･〇〇－一三･〇〇）－北股（一四･〇〇）

二隊　猿倉（九･〇〇）－AC（一一･三〇）一隊の作った雪洞が天井沈下甚しいため新に雪洞を掘る。

十二月廿九日（快晴）　アタック

一隊（川島を除く）　北股（七･一〇）－AC（九･四〇）－二隊に追付く（一〇･三〇）

二隊　AC（七･三〇）－スキーデポ（八･〇〇）－局部的な天候激変に会い引返す（一〇･〇〇）－一隊追付き共に再び登高（一〇･三〇）－奥双子コル（一二･三〇）昼食－ジャンクション直下（一四･三〇）時間が遅いため引返す－AC（一七･三〇）家田、尾藤、住吉は北股へ下る。（一九･三〇）

三隊　細野（一三･〇〇）－北股（一五･三〇）川島、北股より下山。

十二月卅日（曇後雨）　AC 撤收

家田、尾藤、山本、近、大村　北股（八･四〇）－AC（一一･三〇）－加藤等五人と共にテント撤收－北股（一九･〇〇）

篠田先生、住吉、四宮は北股より下山。

十二月卅一日（雨）

近、大村、田島、山本、岡田下山

一月一日（大雪）　BH 撤收

家田、大島、加藤、尾藤、坪井、細見下山

スキー合宿

四宮、大村、林、山本、岡田、近

一月廿四日（雪）　細野到着、午后スキー練習

〃　廿五日（曇）　直滑降、斜滑降練習

〃　廿六日（雪）　ボーゲン練習

〃　廿七日（雪）　烈しい降雪中で練習

尚後半は双子尾根報告に並記す。

〃　廿八日（晴）　黒菱往復、篠田先生同行。

細野（一〇･五〇）－馬止小屋（一二･〇〇）－黒菱小屋（一四･三〇－一五･三〇）－細野（一六･三〇）

林歸阪す。

── 一　九　五　一 ──

一月一日－五日　神城及細野スキー　久保

二月四日　伊吹スキー行

二月廿一日　仁川バットレス其他　田島、山本、坪井、宮本、川島

三月四日　六甲堡塁岩登攀並西山谷下降　大島、徳永、田島、大村、山本、林、近、川島

三月十三日－二十日　志賀高原発哺スキー練習　久保他四名

春山　後立山逆縦走　三月十七日－卅一日

A 隊　加藤（L）、川島、坪井、OB 大久保

B 隊　徳永（CL）、松久、細見

C 隊　大島（L）、尾藤

三月十七日　B 隊大阪発

〃 十八日　B 隊大町より鹿島へ

〃 十九日　西股より冷小屋荷上、ガスの為稜線直下に荷を置き、大町泊
A 隊大阪発

〃 廿日（晴）　（A 隊）早朝大町着、B 隊の細見を加え（一五･三〇）大町発－（バス）－大出（一六･〇〇）－大沢小屋（二四･〇〇）

〃 廿一日（晴）　（A 隊）休養（B 隊）鹿島泊

〃 廿二日（晴後雪）　（A 隊）大沢小屋（四･〇〇）－針ノ木峠（八･〇〇）－針ノ木岳（一二･〇〇）－坪井スリップ負傷（一二･一五）－SH 収容（一六･〇〇）（B 隊）二股まで往復、鹿島泊

〃 廿三日（雪後曇）　（A 隊）SH（一六･〇〇）－大沢小屋（一九･〇〇）
加藤、細見連絡の為下山（二四･一五）
（B 隊）鹿島滞在、丸山に遊ぶ

〃 廿四日（晴）
加藤、細見、大町着（五･一〇）
（C 隊）大島、早朝大町に来る
相談の末、加藤、細見は冷へ連絡の為（一七･二〇）大町を発つ。大島は丸山庄司を伴い大沢へ向い、ヨセ沢より少し上手の営林小舎にて休憩。
一方大久保、坪井、川島は一三･四五大沢、二十時頃ヨセ沢近くを通行中、大島、庄司に発見され小屋に入って休む。

（B 隊）鹿島（四･〇〇）－二股（六･〇〇）－長ザク沢－冷小屋（一〇･三〇）

〃 廿五日（晴）　（A 隊）営林小舎（三･一五）－大町（九･〇〇）大島。庄司は今朝到着した尾藤と共に細野へ、大久保、坪井、川島は大町泊。加藤、細見は　鹿島（五･二五）－冷小屋（一二･一五）

（B 隊）冷小屋より鹿島槍往復、加藤、細見より事情を聞き直ちに下山。

〃 廿六日　坪井、松久を除く全員細野へ、坪井、松久は大町泊、廿七日歸阪す。

〃 廿七日（雪＆曇）　休養＆スキー練習

〃 廿八日（雪）　徳永、加藤、細見歸阪。

〃 廿九日（曇後風雪）　残った大久保、大島、尾藤、川島の 4 人で八方尾根より唐松、白馬の縦走を行はんと（九･〇〇）出発したが、第 2 ケルンより風雪烈しい為退却、細野へ歸った。

〃 三十日（曇）全員歸阪

三月二九日―四月七日　栂池、蓮華温泉、白馬　久保

三月三十日　工学部阿部、安宅両教授のお供をして森上より栂池ヒュッテに至る。

三月卅一日　三人にて乗鞍に登る。

四月一日　蓮華温泉行、二十九日大池附近で行方不明となった猟師二名に対する捜索隊（ガイド達９の後を彌兵衛沢ルートより単身追いかけ、蓮華温泉にて合流し吹雪の中を乗鞍沢ルートを登り栂池に歸る。

四月二日－四日　悪天の為滞在、四日午後晴間に乗鞍沢の上部に捜索に行く。

四月五日　白馬単独行。早朝ガス後晴天強風午後曇（四･四〇）小舎発天狗原・乗鞍（デポ）小蓮華をへて白馬頂上（九･三〇）直ちに引返し小舎着、一時、三時小舎発、落倉ヒュッテ新田より松川橋をへて細野六時半

四月六日　細野発、七日歸阪

四月一四、五日　道場キャンプ　山本、林、近、家田、川島

四月三〇日－五月五日　鈴鹿山行　川島、林、大村、北川、細見

四月三〇日（晴）　湊町（八･四五）－湯山（一四･〇〇）－北谷藤内沢出合BC（一四･〇〇）－前尾根－御在所岳－BC（一九･〇〇）

五月一日（晴）　藤内沢－ジャンダルム－御在所岳

五月二日（晴）　BC（七･三〇）－御在所岳－鎌岳－鎌尾根－水沢峠（一二･三〇）－松尾川（一九･〇〇）－大河原（二二･〇〇）泊

五月三日（晴）　大河原（八･〇〇）－松尾川－雨乞岳（一七･〇〇）－杉峠－水昌谷－BC（一九･三〇）

五月四日（晴）　BC 撤収（九･〇〇）－愛知川－セト峠出合（一七･〇〇）

五月五日（晴）　セト峠を越え永源寺を経て八日市に出、歸阪。

五月一日－五日　丹波高原、大堰川源流より由良川源流へ　久保、近

〃　一日　京都－（バス）－大布施－能見－フカント谷水源

〃　二日　天狗峠－天狗岳－大谷一ホケ谷下降－由良川

〃　三日　由良川源流遡行－中山－三国峠△往復

〃　四日　傘峠往復－ケヤキ坂－須後－芦生上流

〃　五日　田歌－（バス）－和知駅より歸阪

一昨年のヘスター、昨年のジェーンと荒らされた丹波高原は交通機関が奥まで入る様になった事とあいまって、以前の奥床しさをよほど失った様に思う、惜しい。

五月十二－十三日　六甲大月谷新人歓迎キャンプ

篠田先生、家田、加藤、OB 徳永、大島、住吉、尾藤、細見、久保、山本、四宮、林、近、由比浜（新人）浅野、広橋、宍戸

六月二－三日　比良奥の深谷より武奈岳　久保、川島、近、北川

六月九－十日　道場　二木、北條、坪井

六月十七日　仁川バットレス其他　久保、川島、山本、宮本

七月七－八日　道場　篠田先生、山本、林、辻川、北川

夏山

カクネ里合宿　七月十八－八月一日

家田（L）、久保（SL）、住吉、細見、二木、山本、近、林、大村、宍戸、広橋、北川、辻川　以上十三名

七月十八日　大阪発

七月十九日（晴）　細野（一二･三〇）－黒菱（六･二〇）

七月二十日（晴後曇）　夕刻雷雨

黒菱（八･二五）－唐松（五･三〇）

七月二十一日（晴）　高度低き断雲

唐松（八･四〇）－白岳鞍部（二･三〇）－白岳沢下降、カクネ中の沢出合下手左岸 BC 地（八･〇〇）出合の滝がまだ出て居らず大いに助かる。

七月二二日（曇）ガス去来

午後グリセード練習、家田、久保、住吉、細見、二木の五名のみ天狗尾根偵察

七月二三日（晴後曇）午後雷鳴を聞く

●直接尾根　細見、二木（cf 本文　　頁参照）

BC（六･三〇）－洞窟尾根末端（七･五〇）－尾根取付（一一･三〇）ピトン脱落の為二木墜落、退却す。

●洞窟尾根　家田、山本（cf 二十四日の項）

●キレット沢下降路雪渓より南槍往復　久保、住吉、近、林、大村、宍戸、広橋、北川、辻川

BC（八･一五）－キレット沢入口（八･五〇）－主稜線（十一･一五）－南槍（二･〇〇）引返し－北槍（二･五〇）－雪渓下り口鞍部（四･〇〇）－BC（五･三〇）

七月二四日（曇）ガス去来、午後近く驟雨

●P1 リッジより扇形残雪トラバースによる天狗尾根　住吉、林

BC（六･四五）－扇残の俣より P1 裾の取付（八･一五）－P1 を登りトラバースして一旦扇形残雪下ルンゼ中段テラスに出る（一〇･五〇）再び P1 籔中を直登、扇形残雪右横に出（一一･五〇）残雪を左へトラ

バースの後直登天狗尾根（一･一五）昼食－小舎岩（二･二〇）－第二岩峰上（三･五〇）－北槍（五･〇〇）－キレット小舎（六･〇〇）（林）

●洞窟尾根　久保、近、広橋

BC（七･〇〇）－取付（八･四〇）－稜上（一〇･〇〇）－第一岩峰（一〇･三五）－再び稜線へ（一一･二五－一二･〇〇）－主稜線（一二･二五）－BC（二･五〇）

●岩登り練習　残り全員

BC 向い右岸の岩壁にて

七月二五日　朝薄曇、後晴、午後相当な夕立あり

●直接尾根　家田、細見、二木（cf 本文 40 頁）

BC（六･五〇）－取付（一一･〇〇）岩質もろく退却（一二･三〇）

●キレット沢右尾根　林、大村、北川

BC（九･三〇）、尾根取付（一〇･三〇）、昼食（十二･〇〇）その上は五米位の垂直のフェースで中段にテラスがあり、その上はカブッて居る。テラスから左上の木につかまって登り、荷物は後でつり上げたので一時間半を消費した。（二･〇〇）雷雨のため（五･三〇）引返し、途中よりキレット雪渓に降りて下る。BC（八･〇〇）（林）

●大川沢唐松窪手前附近迄往復　久保、山本、近、宍戸、辻川

BC（九･二五）－右岸下降－白岳沢との出合（一〇･〇〇）－唐松窪手前引返し点（十二･〇〇）－BC（一･三〇）

七月廿六日（晴）

●P1 リッジより扇形残雪トラバースによる天狗尾根　家田、近（cf 七月廿四日の項）

BC（八･〇五）－P1 下取付（九･〇〇）－扇形残雪右横（一〇･四〇）－扇形残雪上側岩壁をトラバース、扇残上ルンゼ滝の右側より上部に出んと志したるもオーバーハングに阻まれて果さず、扇形残雪に下る、天狗尾根（一二･四〇）－小屋岩下（一･〇〇）鞍残左稜パーティを待ち（三･三〇）合流－荒沢頭（四･三〇－五･〇〇）－キレット小屋（六･一〇）家田、久保、洞窟尾根パーティを（七･三〇）迄待って共に下る。山本、近下り BC（八･〇〇）　（近）

●鞍部残雪左稜より天狗尾根　久保、山本

鞍部残雪とは扇形残雪とは別に、天狗尾根最低鞍部下にあるやはり扇形をなした残雪でこれより落ちるルンゼは扇形残雪より落ちるルンゼと同じ雪渓の俣（扇残の俣）左側へ落ちる。鞍残左稜は取附の岩壁をのぞいては大部分籔と草附ではあるが急な為洞窟尾根等よりは困難である。

BC（八･〇〇）－扇残ルンゼと鞍残ルンゼの間より取付かんとしたが、縁割れと岩壁で取附けず俣の左端より取附く。約一ピッチの岩場でリッヂに出る。ブッシュ中の登攀、ルートを求めて左へトラバース後直登して白色の岩につきあたる。右側をまく、岩の上を薄く地衣類がおほった急傾斜、次いで右側の溝状の草附に入り登りつめてリッヂに出ると鞍部残雪左稜であった（十二･〇〇）－天狗尾根上（十二･三〇）、荒沢偵察をかね天狗鼻の方へ向う。（一･四〇）天狗鼻手前にて引返す。（三･三〇）家田パーティと合す。

●洞窟尾根　住吉、二木、細見、大村、宍戸、北川、辻川

BC（九･〇〇）－取付（一〇･〇〇）－キレット小屋（七･三〇）

七月廿七日（快晴）

●キレット尾根　家田、林

BC（一〇･一五）－洞窟尾根との間の雪渓に入り左側の稜に取附く（一一･三〇）－岩塔の頭（二･〇〇）－右側の雪渓へ下り小屋への俣をつめてキレット小屋へ入る（三･〇〇）　　（林）

●山本、広橋は雲ノ平行計画の為、大阪のパーティと大町で落合うべくキレット沢より下山。

●休養　残余

下流左岸で水晶掘り

七月廿八日（快晴）

●蝶型岩壁左稜　家田－林、久保－大村（cf 本文 39 頁）

BC（六･三五）－洞窟尾根下端（七･四〇）P2、P3 間雪渓に入りスラブでアンザイレン、天井ルンゼ（一〇･三〇）昼食－左稜上（一二･〇〇）ザイルを解く。天狗尾根（一･〇五）－北槍－キレット－BC（七･〇〇）

●五龍岳往復　近、辻川、北川

BC（七･三〇）－降路雪渓最上部で右股をつめ稜線（九･四五）－五竜頂上（一･三〇－二･三〇）－キレット沢下り口（六･〇〇）－BC（七･〇〇）

●蝶型岩壁右稜　住吉、細見、二木

クレバスに阻まれ取附も得ず引返す。

七月廿九日（晴）断雲

撤収　出発（一〇･〇〇）－キレット沢登りの途中小事故で負傷者が出たため、近、林、北川、辻川は冷迄、残余はキレット小屋泊。

七月三〇日（晴）ガス去来

冷を経て下山、近、林は歸阪、北川、辻川は大町で一泊の後美ヶ原へ、残余は細野へ。

七月卅一日（晴）断雲

細野発

八月一日　歸阪

八月十三－二十日　妙高火山群　久保単独

〃　十四日　田口－笹ヶ峰

〃　十五日　高谷池黒沢池をへて、長助池より直接とりつき、地図に露岩記号ある岩壁下に出てこれを登り北肩に出て妙高に達す、歸路は地図点線路通り。

〃　十六日　火打をへて焼往復

〃　十七日　乙見山峠を越え小谷温泉へ

〃　十八日　髯剃滝上部ガレ記号の所より尾根に取付き、天狗原山、金山、繁倉尾根をへて雨飾山に達し、梶山新湯に下る。

〃　十九日　山口よりバス糸魚川へ二十日帰阪

八月　　戸隠　大島他一名

八月　　塩見、赤石　徳永、松久、大久保、太田敬氏

三伏峠－塩見往復－荒川岳－赤石岳－二軒小屋－甲府

集　会　記　録

（一九五一・四－一九五一・九）

校舎が分散しているので毎金曜日后五時半より日本山岳会支部のルームで集会を行っている。

四月十三日　　春山報告会

四月二十日　　集会方針の評議等

四月廿七日　　山行計画発表等

五月十一日　　鈴鹿及丹波高原報告（川島、久保）

五月十八日　　「日本初期山岳文典紹介」（篠田先生）「山行の適正について」（細見）

五月廿五日　　「高山病に就いて」（小沢）

六月一日　　「ラヂウス使用上の注意」（久保）「カクネ里の概念」（家田）

六月八日　　「雪の物理的性質」（二木）
今西先輩に来て頂きカクネ里につき質問す。

六月十五日　　「岩登り術の基礎」（川島）

六月廿二日　　「登山靴・ヤッケについて」（田島）

六月廿九日　　「雪崩の概念　続」（山本）

七月六日　　「山の気象について」（坪井）

七月九日　　「登山家の常識としての救急処置」（大久保先輩）

七月十三、十五、十七日　　夏山準備会

八月十日　　簡単な夏山報告

八月二十日　　シュラーフザック購入の為緊急集会

八月廿四日　　集会方針について討議

九月十四日　　夏山報告会　於学生課屋上ホール　篠田先生、関先生出席

九月十九日　　水野祥太郎先輩に帰朝談を聞く会　於病院恵済団、日本山岳会と共催

編　集　後　記

○　編集スタッフが不慣れなものばかりであったのと、秋及冬の三回にわたる北岳行に参加した為に、九月以降遅延に遅延を重ねた第3号発行も、徳永、大島両兄の御援助により漸く実現されることになった。

○　今号では特に取上げる程の登攀実績がなかったので、我々の登山に対する思索的な面を出す事を主眼としたが、数多い山行記録と大島兄の「我等の歩み」から、我々が山に傾けた情熱と努力をくみ取って頂ければ幸いである。又この一文は、会創立以来三年に垂んとし、当時の会員が殆ど現役を退こうとする今、時宜を得たものである。対外的のみならず、対内的にも若い会員達が阪大山岳会に於ける自己の歴史的位置をはっきりと認識する上に一つの手掛となるからである。

○　会員の原稿は多数に上ったが、前述の編集方針の為削り或は除いたものが多い。この点寄稿者のご了承を乞う次第である。(K)

昭和廿七年二月廿五日　印刷発行
大阪大学山岳会「時報」第三号
発行所　大阪市北正堂ビル前物館ビル三階　大阪大学山岳会
編集責任者　大阪大学山岳会内　川島　勇
印刷所　大阪市西区江戸堀北通二丁目一七　美研社
電話土佐堀五〇〇八番